『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』26（2024）：235-294

金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈
金田一京助宛ノート散文説話「雪狐のカムイ（upas cironnup kamuy）」

藤田　護

キーワード：アイヌ語、金成マツ、口承文学、散文説話

1．はじめに――資料とその特徴

本稿では、筆者のこれまでの取り組みに引き続き、金成マツが筆録した口承文学の散文説話を翻刻し、現代アイヌ語表記にするとともに日本語対訳を付して公刊する。今回は、金田一京助宛筆録ノートのなかの散文説話の一つ、「雪狐（upascironnup）」をとりあげる。この物語は、既刊の「カワウソが私に化ける（esaman i=sinere）」（【カワウソ私に化ける 1 及び 2】および「鹿を妻とした貧乏人（yuk mat ne kor wen aynu）」（【鹿の妻】）の次に筆録されており、本稿の物語まで 3 つが、昭和 4 年（1929 年、月日は記されていない）に金成マツによって金田一京助に向けて連続して筆録された散文説話を構成する。

上に記した 3 つの物語はいずれも、金成マツによる金田一宛筆録ノートにおいて最初期に記録された散文説話であることに加えて、形式上の特徴としては、これらの散文説話の周囲に筆録されている英雄叙事詩と同様、ノートに細かい行替えをもって筆録されているという点を共有している。以下 3．の翻刻部分に行替えの位置を示すが、短い 2 音節の単語一語だけで行替えをしている箇所もある。散文説話としては、この後の昭和 7 年（1932 年）8 月 7 日に筆録された「一人の白い瘡ぷたのある女が東の方から来る物語（sine esukopitce retar cima koeyanrasne menoko mosirpa wano ek uepeker）」からは、ノートの行の全体を使って書き続けるようになっている。英雄叙事詩等も含めた筆録過程でいえば、昭和 4 年には、上述の 3 つの散文説話を筆録した後で 9 月 16 日に「小伝（pon oyna）」を筆録しており、ここまでは細かい行替えが採用されているが、次の昭和 5 年（1930 年）2 月 11 日に「二人妻（tu mat kor）」を筆録するところからは行全体を使った書き方になっている。金田一京助宛筆録ノートにおいては、このように途中で金成マツによる筆録形態に転換が生じており、今回扱う散文説話はその転換前に位置している。

この物語ではオコジョ（またはエゾイタチ、アイヌ語ではウパシ チロンヌプ）が主人公であり、人間のくに（アイヌ モシリ）が飢饉になっていることで苦しんでいるオオカミのカムイたちを助けにいく。表題には upas cironnup（雪狐）の話であると（おそらく金田一京助によって）書かれているが、金成マツの筆録テクストにおいては最後まで主人公が何のカムイなのか言葉上では述べられないままである。ただし、この物語の中には主人公のカムイが土のなかを潜って移動する場面があるが、

これは他のウパシ チロンヌプが主人公である物語のなかでも出てくるため（萱野茂『ウウェペケレ集大成』のなかの第一話「白狐と蜘蛛の知恵比べ」（萱野 1977））、このカムイの特徴であり特殊能力であると考えられる。この動物の小柄で神出鬼没でどこから出てくるか分からないイメージから、そういう能力が割り振られたのであろうか。また、物語内の複数の箇所で用いられる a=ukoeramunin kamuy「人々に気づかれないカムイ」という表現が、このカムイのキャッチフレーズのようにして使われており、この表現が冒頭に出てきたところで物語の聞き手はウパシ チロンヌプであると気づくのであろう（参考までに eramunin「気がつかない」は沙流のアイヌ語では eramewnin という語形で記録されている）。

また、この物語は、人間のくにで物語が展開していくが、そこではカムイたちが生活する領域と人間たちが生活する領域が完全に分かれており、主人公はカムイたちの生活領域において他のカムイたちとの関係（社会関係）を構築し、活動を展開する。同じく飢饉に苦しんでいるウラシペッ（Uraspet）の人間たちとのあいだでは、夢と酒などの贈り物を通じてやり取りが行われ、人間たちは物語に直接登場することはない。このように、人間のくににおいてカムイたちと人間たちの生活領域が分かれて物語が展開してくのは、金成マツの姪の知里幸恵『アイヌ神謡集』（【神謡集】）のなかで、シマフクロウのカムイが主人公となり、人間界の飢饉を解決しようとカムイのくにへ談判の使者を送る第 7 話「コンクワ」とも共有される特徴である。

このオコジョが主人公となっている「雪狐」は、「カワウソが私に化ける」と「鹿を妻とした貧乏人」同様に、萱野茂『炎の馬』において日本語で紹介されている（萱野 2005、p.89-99）。萱野による紹介（または再話）がもつ特徴は、既に【カワウソ私に化ける 2】および【鹿の妻】で詳細に検討したため、本稿においては類話との比較検討を重視することとしたい。

この「雪狐」の類話が、知里幸恵がノートに筆録した散文説話にある。この散文説話は北道邦彦によって「飢饉を司る神の話」と題され、翻刻・翻訳・注解が施されて公刊されている（【知里幸恵ウウェペケレ】 pp.51-95）。この知里幸恵が筆録した物語は、その構成においてここでの金成マツ筆録の物語とよく似ているが、その一方で重要な相違点も存在する。これらをまとめてみると以下のようになろう。

（1）土台となる物語は共通である。飢饉を解決するために、主人公のカムイが兄二人妹一人の家族を訪問する。そこで方術（まじない）を使い、食糧を増やして村人たちにふるまい、その後に狩猟で獲物をとることを邪魔する魔物を退治する。主人公が人間たちから感謝される。

（2）両者で主人公が異なる。知里幸恵の筆録した物語では冒頭で主人公が自分は飢饉のカムイの首領（トノ）であると明言しており、自分の叔父が飢饉をもたらしているという設定になっている。悪魔に分類される飢饉のカムイの甥が、人間世界に飢饉をもたらすのではなく、その飢饉を解決するという、やや矛盾したはたらきをする物語である。

（3）カムイの人間との関わり方が異なる。知里幸恵の筆録した物語では、人間世界が飢饉になったところで、主人公のカムイが実際の人間の家庭を訪問する。これはおそらくかなり異例で、飢饉になったからといってカムイが（人間の姿をして）人間の前に（夢を見せるのではないかたちで）現れることはあまりない。金成マツの物語でオオカミのカムイの兄妹だったところが、知里幸恵の物語では人間の家族になっている。金成マツの物語ではオオカミのカムイの妹が主人公と結婚することになるが、知里幸恵の物語では人間の娘が主人公のカムイと結婚したいと思っている。金成マツの物語では村はウラシペッであり、知里幸恵の物語では村はオタスッ（ tasut）である。

（4）知里幸恵の物語では、主人公のカムイの叔父が飢饉を生じさせており、人間世界の食べ物の魂（aep ramat）を吸い上げて食べてしまう。しかし主人公が飢饉を解決するために退治する魔物は、叔父ではなく別の魔物（イワポソインカラとペポソインカラ）であり。主人公（甥）が飢饉を解決すると、叔父は怒って別の場所に行ってしまう。その場所が飢饉になる。そのため、飢饉の原因と飢饉の解決が何かちぐはぐになっている印象を受ける。

（5）金成マツの物語では狩りにおいてシカとサケの両方が狩られるが、知里幸恵の物語ではシカだけが出てきてサケが出てこない。魔物の名前も少し異なっており、金成マツ物語ではキナポソインカラとペポソインカラであるが、知里幸恵の物語ではイワポソインカラとペポソインカラである。

このように共通点と相違点を検討すると、それぞれの物語はモチーフは共有しつつも、系統を異にする伝承なのではないかと思われる。人間の村の名称がウラシペッである物語は金成マツの伝承には頻出するが、オタスッが出てくる物語は管見のところ英雄叙事詩か英雄叙事詩とよく似たモチーフをもつ散文説話「カワウソが私に化ける（esaman i=sinere）」（【カワウソ私に化ける 1 及び 2】）に限られている。知里幸恵はこの散文説話以外にもオタスッ村が出てくる物語を記録しており（【神謡集】第 8 話「海の神が自ら歌った謡アトイカ　トマトマキ　……」など）、もしかすると旭川に住んでいるあいだに道東の物語の語りに接して、それを覚えたことが影響しているかもしれない。

また、この物語は、「金田一京助フィールドノート」（北海道立図書館が所蔵し、マイクロフィルムで一般公開されている）のなかで、鍋沢コパアヌから金田一京助が記録している物語に、類話が存在する。これは沙流川流域の伝承と幌別の金成マツの伝承での比較検討を可能にする重要な記録であるが、現状の公開形態では一般のアクセスが難しく、また金田一京助の細かな書き込みもそこにあるため、今後稿を改めて、校訂したテクストとともに比較と考察を行うこととしたい。

2．ものがたり

私は皆に気づかれないでいるカムイであり、人間のくにの山の狩り場にある私の家で、刀の鞘の彫刻をしながら暮らしている。カムイというものは、急に［人間のくにの方を］振り向いたりはしないものなので、長いこと人間のくにを見守らないでいる。

ある日、顔を上げて人間のくにをよく見てみると、まさか人間のくにが飢饉になっており、人間たちがたいへん苦しんでいる。人間のくにを守護するためや働くために、天から山や沖へと下ろされた、位の高いカムイも位の低いカムイも、皆が餓死しそうになっていて、私はたいへんびっくりする。

ある山の後ろで、オオカミのカムイが二人兄弟と一人妹で、人間のくにではたらきに天から下りてきていて、たいへんな狩り上手でよい食事をして暮らしていたのが、そのような真の勇者であっても毎日山猟に行っても獲物がとれず、たいそう痩せて気を揉んでいる。皆に気づかれないカムイであっても、この飢饉のときに私が人間のくにを守護しなければ、他に助けられるカムイがいなさそうに思うので、私は支度をして、火打石入れを背負い、一つ山向こうのオオカミのカムイの住んでいるところに赴く。

金の家が、いかめしくそびえ立っている。家の外で私は訪いを知らせる咳ばらいをすると、家の中で音がしたあげくに誰かが戸口で覗いていて、私が見ると、感嘆するほど美しい相貌のオオカミのカムイの妹が、食べ物が不足して痩せて、顔色も悪い。私の靄を目で打ち払い、遠慮しながら頭を下げて「今日はたった一人でいるのです。兄たちは山猟に行っていて、もうしばらくしたら山を下りてくるでしょう。料理ができるものもありませんが、入って休むだけでもしてください」と言いながら、中に入って掃き掃除をして、座を整える音がする。

私はかしこまって家の中に入ると、このカムイたちはたいへんな長者で、家一杯に宝物が並び、言葉が及ばないほど素晴らしい。炉の上座に私は坐り、左座にオオカミのカムの妹がかしこまっていて、巫力が強いのでひそかに私の素性を探している。私はわざと彼女の目の前に靄をかけて、あたりの様子を眺めると、まったく食べ物の残りくずもなく、倉庫に食糧の守り神として干し魚の半分やお椀一杯分くらいのが見える。

夕方になると、人が山から下りてくる音がして、見ると、兄弟のカムイたちが金の小袖を重ね着して、腹を空かせているものだから痩せて弱々しい様子で、右座に座る。私は手を高く差し上げて、挨拶をする。「皆に気づかれない者で私はあり、暮らしていたのだが、たいへんな飢饉になっているようなので、人間の村を見舞いに今日歩き回っていると、カムイとしている方々が山猟に行っている様子だったので立ち寄った。どうだろうか、山猟に行って、獲物などあるか、魚などあるか？」と述べると、カムイたちは、「シカは本当にたくさんの群れがあふれているのに、全く矢が届かない。川でもサケが群れているのに、少しも槍が届かない。じっと家にいても腹が減るし、どうかカムイたちが私たちを気の毒に思い、サケ一匹でもシカ一頭でもとらせてくれないかと思う。私たちの同族（のオオカミ）たちも飢え死にをして、戻ることができない。私たちは人間たちを守ることになっていたのだが、今や子どもたちも飢え死にする様子を気の毒に思い、助けたいと思い、毎日今は私たち二人であれこれ動いているのだが、うまくいかない」と話す。私は相槌を打ちなが

ら、「明日一日私を山猟に連れて行ってくれ。もしかしたら、小さなシカの一頭なり小さなサケの一匹なり行き会うぞ」と私が言ったところ、［その二人は］「もう完全に力なく、やせて死にそうだと思っていたが、カムイが私たちを気の毒がり、一緒に行きたいという話ならば、死んだようであっても私たちの猟場へとお連れしよう」と言う。

私はカムイたちが次のように考えていることを知る――〈どこから来たカムイなのか。何も料理するものもなく、倉庫にただ一尾の干し魚の半分と、お椀一杯分の穀物があるだけだ。昔からカムイの言い伝えでは、どれほど飢饉がひどく倉庫に中身が亡くなったとしても、少し食糧を倉庫の守り神として置いておくものだというから、これをカムイに食べさせてしまうと、なおさら飢饉がひどくなる。どうすればよいだろうか〉と３人が同じように考えて心の中で泣いている。

この３人が私の素性を探ると、この者たちの目前に私は靄をかける。私はカムイたちのことをたいへん気の毒に思い、わざとその少女（妹）に歯のあいだを私がちょっと延ばしたところ（まじないをかけたところ)、少女は立ち上がって小さな鍋を洗い、そこに水を入れて火にかけ、倉庫にある干し魚とお椀一杯分の穀物を下ろして、その穀物で小さな飯を炊いて、よそって一人で食べてしまう。小さな鍋をひどく舐めて互いに重ね、次に小さな鍋に干し魚を刻んで入れて、煮て、またひとりで美味しそうに食べ続け、汁まで全て吸ってしまう。その後、彼女は後悔して泣いている。

カムイたちは心の中で腹を立て、〈悪い妹のやつはなんという振る舞いをすることか。食糧の守り神のカムイにも食べさせるのだろうと思っていたが、一人でこのように食べてしまうのなら、少し下ろしたものを私たちにも食べさせてくれれば、少し私たちの心がしっかりするだろうに、［妹は］毎日一人で家にいて力をつけ、その上一人で食事をしているようだ。私たちは毎日何も食わずに疲れているのだから、何か少しでも気の毒がってくれればいいのに〉と考えて、心の中で大いに泣いているが、私に遠慮して妹を叱りつけることもない。

少女もたいそう後悔して、〈本当に何のカムイに憑かれて、私一人でわずかに残っていた食糧の守り神を食べたのか。どんない兄たちが私のことを怒っているだろうか〉と思って、泣きに泣く。そのことに［兄の］カムイたちは一層腹を立て、〈悪い妹が、わずかに残っていた食べ物を食べ、それから何をこのように泣いているのか。お前はとんでもないことをしたのだから、このカムイが帰ってしまった後で、お前のことをひどく叩いてやろうぞ〉と考えている。

私は心の中で笑って、少女に歯のあいだをちょっと延ばしたら（まじないをかけたら)、少女は立ち上がって六本の紐のついた大鍋を炉にかけ、そこに水を入れ、大きな火を焚き、またその後で後悔して泣いている。［兄の］カムイたちは、これにいっそう腹を立て、〈私たちの悪い妹の考えるように考えるものではない。今は別の魔物になったようだ。とても心がきれいな者がこんなことをするのだなあ。小さい鍋でも腹が立つのに、六本の紐のついた鍋でいったい何を煮ようとしているのか。もしや煮立たせて私たちの上にかけ、殺そうとしているのか〉と考え、妹のことをとても恐れ

ている。私はとても可笑しく思う。

誰にも見えないように、半分が赤く半分が白い穀物の粒を一粒私は火打石入れから出して、沸騰して吹きこぼれている大きな鍋へと私は投げ入れる。しばらくすると、その大鍋の蓋が持ち上がって、美味しそうなご飯があふれ出す様子で、私はこのように言う――「さてさて、カムイなる淑女よ、一人だけあなたは食事をして力をつけたろうから、この鍋を引き上げて食べ物を配りなさい。私も腹が減っている」と言うと、［兄の］カムイたちは愕然として、目をひん剝いて大鍋を見つめている。その少女も不思議がって、脚を曲げながら大鍋を引き上げ、蓋をとって美味しい飯が一杯になっているのを見ると、とても驚いたり、喜んで口元に笑みをたたえて、［兄の］カムイたちもこのように妹に腹を立てている感じであったが、たくさんの食べ物があるのを見ると怒りも忘れて、安心し、大いに喜んで眺める。［少女は］高盛の飯を私に差し出し、兄たちにさしだし、［兄の］カムイたちは腰の真ん中を折り屈めて、二十の拝礼（オンカミ）、三十の拝礼を互いに重ね、私にも拝礼をし、私も食べ物に拝礼をする。

それから、［兄の］カムイたちは、もう何日も食事をしていないものだから、美味しい飯を嘆賞し、少女もまた食べに食べる。私は可笑しく思って、「あなたがたの村人たちも腹が減っているだろうから、呼んで食べさせなさい」と言うと、何とまあカムイたちは喜んでそれをすることだろうか、私に向かって低く、そして高く拝礼をし、少女が外に出て［村人たちを］呼び集め、「同胞たちよ、今宵はカムイが目をかけてくれて食べ物が一杯あるから、来て食事をしなさい」と言ったところ、しばらくして、戸口のところにカムイたちが痩せている様子で、男たちも女たちも半数は歩き、半数は這って、物置きのところから入って戸口のところまでひしめき合って、大勢がやって来て、それから私たちが碗で盆で［食べ物を］差し出すと、我を忘れるほどにとても皆が喜ぶ。歩ける者が食事をし、それから歩けない者に食事を運び、夜通し一つの鍋に入っている物を大勢の人が食べて、運ぶが、中身は一層増えていく。カムイたちはたいへん驚いて、食べ物の間からでも私の素性を探ろうとするが、できない。

今や東雲の朝と闇の暁が行き違って明け放たれ、［兄の］カムイたちを私は誘って、山へと行って見てみると、本当に牡鹿の群れが一方に、牝鹿の群れがもう一方にひしめき合っている。なので、長い尾根の先端に私は立って、カムイたちが川上からシカの群れをわたしにむかって追い込むように言う。そうすると、［カムイたちは］はるか山の方から大勢の牡鹿の群れと牝鹿の群れを別々に私に向かって追い込んでくる。シカが走って跳ね回る音がザアザアとざわめきわたり、山を下る音が地面に響きわたる。牡鹿の群れの前にキナポソインカㇲ［魔物の名前、草を透視する悪魔］が、その見る目が草露の色をして駆けている。この魔物のカムイが悪戯をして、人がシカの獲物を手に入れられなかったことが分かる。私はヨモギの小弓にヨモギの小矢をつがえ、キナポソインカㇲの脈打つ目をを激しく射ると、骨がボロボロになって倒れ、それとともに鹿の大量の群れが高い恐ろし

い山の下へと落ちて死に、大きな山のように死んだ鹿が積み上がる。

［また］大きな川が下ってくるのがさやかに見えて、私は見ると、サケたちが上の群れは日に焼け、下の群れは砂をこするように魚が群れる様子で、魚の群れの上にペポソインカラ［魔物の名前、水を透視する悪魔］の、その見る目がとび出して駆けている。ヨモギの小さな弓と小さな矢を私はつがえ激しく射ると、骨がボロボロになって倒れる。ただ心に思っただけで、魚の大量の群れを川岸へと私は揚げて、どこまでも美しい魚の列ができる。

さてそうして、尾根の突き出しているところで、薄い土くれを私は自分の上にかぶせ、目と口ばかりが突き出るようにしていたところ、オオカミの男たちが遠く駆けてきたものだから、息をつく音が荒く、「こう我々のそばを跳ね回るシカの群れをこちらへ追って、足音がビッシリとついている様子なのに、一頭もいない。どうしたことだろうか」と言いながら、断崖の下を覗いてみたところ、死んだ鹿の大きなかたまりを見て、大いに驚く。すぐに川の方へと向きを変え、死んだ魚のかたまりを見て、二人とも腰を抜かして、何度も拝礼（オンカミ）を繰り返す。「なんとまあ私たちもカムイであったが、どこから来たカムイなのか、このように私たちを巫力で上回られて、二度も三度も私たちはこのように助けられている。今や人間の村が繁栄することができ、カムイも皆がイナウを受け取ることができるだろう」と［オオカミのカムイの兄弟が］喜んで、大きな牡鹿を皮を剥いで、大きな背負い荷にして山を下りると、また小さな悪戯を私はして、地中をくぐって、オオカミがこの上なく恐れて気味悪がるものが蛇であることを知っているので、［オオカミのカムイたちが］大きな背負い荷を作って、（荷物を背負っているものだから）首筋を前方に伸ばしながら言葉を交わし、「私たちが山を下ったら、どれほど妹や村人たちが喜ぶだろうか」と言う、その前に、道を横切る大舟木の幹ほどもあるものに私はなって体を伸ばしていたところ、［オオカミのカムイたちは］私の方に目をやると本当に心の底から驚いて、このように人間であったものが、本当のオオカミ二匹で、自分たちの背負い荷を投げ出して、本当に本当にウォーと大きなうなり声が、山の木原の上にこだまして、あまりにも驚いて大急ぎで走って、後ろへ何度も屁をこき、盛大な下痢をしながら駆けるけれど、同じ場所にばかりいて足を上げて跳ねている。

私は地中をさっとくぐって自分の家に戻ってきて、そうして笑いに笑ったあげくに、腹が痛くなるまでそのことを笑う。カムイたちが意識を取り戻すと、その恐ろしいものもいなくて、たいへんな災難に遭いながら山を下りて、初めて皆で喜び合う。

さてそうして、私はウラシペッ人に、このように人に気づかれないカムイで私はあって、人間の村を回復させるために、猟場で鹿やら鮭やらたくさん私は殺してある、ということを夢に見せる。ウラシペッ人は喜んで、少し力のついた村人たちに指図をして、鹿を運び鮭を運び、今や村が回復する。ある日、神窓に影が差す様子なので、そちらを見たところ、大きな盃が溢れるばかりになみなみとして、その上に削りかけのついた捧酒箸（キケウシパスイ）が行きつ戻りつして、使者とし

て伝言を伝え、かくかくしかじか人々が私に感謝していることを、すべて言い言いして、私はまったく返礼しようもない（ほど感謝を伝えられる）。人間が酒でイナウでひたすらカムイに対して祈りを捧げているという伝言で、本当に私は嬉しく思う。私は大きな盃を受け取って拝礼（オンカミ）をして、六つの宝器（ほかい）に少し注ぐと、盃を私は運んで、それから窓を通って私が欲しがっていたものがイナウであったところ、美しいイナウがたくさん入ってくる。

今や酒が美味しくなり、私は村人たちに命令して酒漉しをする。私は酒宴の準備をし、ふと目をやると、オオカミのカムイたちがずっと私の素性が分からずに探している。その少女［オオカミの兄弟の妹］は私に恋をして、病気になって寝込んで、泣いている。〈何のカムイがよもやこのように我々を霊力で上回って、いろいろな恥ずかしめで我々をだますのであろうか。このカムイを見ないで、私はこの国の上で［誰か他の人と］夫婦になることはしない〉と［オオカミの兄弟の妹が］考えて横になっているのを見ると、本当に私は笑いたくなる。

かくかくしかじかで、私がしたことは半分は悪戯をして遊んだことでも、キナポソインカラ・ペポソインカラという大変な悪魔が飢饉魔を引っ張り出して、カムイが誰一人としてそれを見ることができなかった。そのせいで人間の村がもう少しで消滅させられるところであった。人間がいなくなってしまったら、人間の国の上へと振り向く、えらいカムイもえらくないカムイもイナウを受け取ることができず、ノミされる（祀られる）ことができないだろうと私は考えるので、私は助けにあなたたちのところに行って、まずはあなたたちを救ったのだということを、すべて私は夢に見させる。そこではじめて［オオカミのカムイたちは］私であることを分かって、自分たちの鼻をおさえ、口をおさえ、皆で驚く。

蛇に私がなって、彼らがそれに驚愕する様子、そのことをとても恥ずかしく思っている様子を私は気の毒に思い、驚くにしても、まさかあまりにもこういう様子になるだろうとは思わないものだから、私もびっくりするけれど、ひたすら可笑しく思う。

皆がやって来て、カムイが大勢集まって、カムイがみな私を称賛し、私に感謝し、毎日私たちは酒を飲む。カムイたちに私は人間のイナウの半数から、二つやり、三つやり、一つやり、本当に皆が喜ぶ。

カムイたちが皆私に感謝しながら帰って行った後で、オオカミのカムイたちを私は引きとめて、毎日よもやま話をしたあげくに、彼らの妹を私は妻にもらいたいと私は言ったところ、カムイたちは本当に喜んでこのように言う――「本当は私たちからそのことを相談したかったのですが、私たちがそのことに気兼ねをし、遠慮をしていたところを」と本当に私に感謝し、オンカミ（拝礼）をする。少女は泣きながら喜んでいるように私は思う。

彼らが感謝しながら帰って、二日三日するとオオカミのカムイの妹［の姿］が私の顔の前にちらついて、私の手力もしびれてしまう。時々食事をし、時々は食事もせずに横になっていることを私

は続けて、ある日のこと、その少女がカムイのような容貌をして、大きな金の背負い袋を背負って来る。そうすると右座の私の傍を叩いて［ここへおいでと］私は呼ぶ。彼女はずって這って、遠慮とともに来る。私は彼女を撫でさすり、かくかくしかじかこれまでのあいだ遠くから思いを寄せていたことを言い、お互いにかくかくしかじか思っていたことを言って、私たちは夫婦になる。
いつまでも人間のイナウや人間の酒で私たちはノミされて（祀られて）、私はそれでカムイとしての格を高めて、二人の子ども、三人の子どもを私たちはもうけて、いつもいつもそのように暮らしている。

３．翻刻・現代表記・原文対訳

留意点

原ノートは、それぞれのページの左端だけを使って書かれており、したがって頻繁な改行がある。翻刻部分における改行はすべて半角の「 」で示している。ノートにはページ番号が振っていないため、筆録の最初のページを 1 とした通し番号を振った。以下は、ノートのページごとに原ノートの翻刻、現代表記テクスト、およびその翻訳を示していく。

現代表記については、ここまで千葉大学の各種刊行物で用いられた表記方法を踏襲している。翻刻については厳密にページに従って記しているが、現代表記と翻訳では、ページをまたぐことで理解が困難になると思われる語句のつながりについては、前のページか後ろのページに移して、まとめた。現代表記と翻訳については、後の整理の便宜を考え、ページ数とそのページ内の行番号を組み合わせた行番号をそれぞれ振ってある。訳の方針については、【カワウソ私に化ける 2】を参照されたい。なお、発言については「　」で括ったが、心内語として独立している内容の場合には〈　〉で括るという工夫を試みる。

p.1

【原文翻刻】

u as ironnup kamui
yayeyukar uye eker
ukoeramunin[1] kamui neine inu mos ir kimun wor iwor sokata un ise upsotta
ke us e nuye s irka nuye kikane ramma kane katkor kane nan awa kamui[2] anakne
nisap

[1] 横に「皆気ガツカナイデイル」との書き込みがある。
[2] 横に「人間界へ早ク向カナイモノ」との書き込みがある。

【現代表記・日本語訳】

0101　upas ironnup kamuy yayeyukar uepeker

［題名］雪狐のカムイが自ら語ったウエペケレ

0101　a=ukoeramunin　kamuy a=ne　ine

皆に気づかれないでいるカムイで私はあって、

0102　aynu mosir kim un iwor iworso ka ta a=un　ise upsor　ta

人間のくにの、山の狩り場、狩り場の上で私の家の中で

010　kepuspe nuye sirka nuye a=ki kane ramma kane katkor kane an=an awa

鞘を彫刻し、刀の鞘の表を彫り、いつもそうやって私は暮らしていたところ、

010　kamuy anakne nisap

カムイというものは急に

p.2

osarpa　somokipne　kusu　o　onno　inu　mos　ir　uwampareka　somoki　s　ine antota　e　uni anwa　inu　mos　ir　uwamparewa　nkaran awa　sennekasui　s　iran　kuni　ramu ai　inu mos　ir　kem us　wa　tane anakne　inu　ito

0201　osarpa somo ki p ne kusu[5]　o　onno aynu mosir a=uwampare ka somo ki.

振り向いたりしないものなので、長いこと人間の国をよく見ることもしない。

0202　sine an to ta　epuni=an wa aynu mosir a=uwampare wa inkar=an awa

ある日のこと、顔を上げて人間の国をよく見てみたところ、

020　senne ka suy siran kuni a=ramu a　i

まったくそんな様子であるとは思わなかったのに、

020　aynu mosir kemus wa tane anakne aynu pito　utar

---

ramunin「向フ見ズノ　注意セヌ. a　.　.t.　as　.　are ess.　o ne　e t.　ot to a　know e　e.　o treat as a stran er　o s i　t.　yn　ramu-unun.　amueunin.」【バチラー辞典】p.127。ここは不定人称なので、人々がこのカムイのことを a know e　e しないことになる。萱野茂は、この箇所を「いたのも忘れられるくらい、というより神々は私の存在すらも知らないほど」としている（萱野 1977、p.72）

横に「人間」との書き込みがある。

[5] 動きがゆったりとしているのは位の高いカムイの特徴でもあるので、人に知られていないからといって、それはこの主人公の雪狐（オコジョ）のカムイが見下されているわけではないことが、ここから分かる。もっとも、もともとこのカムイは位が高く強力なカムイとして知られている。

この pito という単語は、金成マツの英雄叙事詩においては kamuy と対を成すように用いられることが多いが、散文説話においては aynu pito でただ「人間」という意味で用いられるか。参考

人間の国が飢饉になって、今や人間たちが

p.

【原文翻刻】

utara tane s ino yaiwenukarpa kimta repta inu mos ir unkine kusu ene koiraukitupa kusu kanto orowa sapte ankamui ene s inu ur kamui ene o ittano tane kemekot kuni kotpoki

【現代表記・日本語訳】

0 01 tane sino yaywenukar[7] pa.

今やたいへん苦しんでいる。

0 02 kim ta rep ta aynu mosir epunkine kusu ene koirawkitupa kusu

山に、沖に、人間の国を守護するためだったり、そこで働くために、

0 0 kanto oro wa a=sapte pan kamuy ene sinupur kamuy ene

天から下された偉くはないカムイやら本当に偉いカムイやら、

0 0 opittano tane kemekot kuni

皆が今や餓死しそうな

p.

【原文翻刻】

omawa okai s iri ramnukare s ino iyokunnure n taap s ine nu uri os maketa orkeu kamui tuirwaknewa s ine tures ne wa kanto orowa inu mos ir oiraukitu a kusu rapwa okai s ino ison wa enokor okairok awa

【現代表記・日本語訳】

——nekon kane wa turep emem pukusa emem ene a=kar wa a=e kuni i aynupito utar a=eramante wa「何とかしてウバユリでもアイヌネギでもこうして取って食べるのだということを人間たちに知らせて」【知里真志保フィールドノート 】pp. 2- 。

[7] 金成マツはこの単語を yaywenukar（金成マツの表記では yaiwenukar）という語形で記しており、金田一京助は【ユーカラ集】各巻でこれが yaywennukar だろうかという注を付けている（【ユーカラ集 1】p.2 、【ユーカラ集 2】p.19 、【ユーカラ集 5】p.2 2）。知里幸恵は、【ノート版神謡集】で yaywenukar と書いた箇所が、刊行された【神謡集】では yaywennukar という語形に表記が変わっている。これは何かこの間の金田一京助とのやり取りが関係しているであろうか—— i=kor kotan kemus wa tane anakne yaywenukar=as kane okay=as awa「私たちの村は飢饉で、もう私等はどうしたらばよいか本当に困っていましたが」【ノート版神謡集】第 8 話、p.95。 i=kor kotani kemus wa tane anakne yaywennukar=as pakno epsak=as「私たちの村に飢饉があってもう、どうにも仕様がない程食物に窮している時に」【神謡集】pp.120-1。

0 01　kotpoki oma wa okay siri a=ramnukare[8]. sino iyokunnure=an[9].
寸前の状態にある様子を私は心で見る。本当に私は驚く。
0 02　taap sine nupuri osmake ta　orkew kamuy tu irwak ne wa sine tures ne wa
ある山の後ろに、オオカミのカムイが二人兄弟で妹が一人で
0 0　kanto oro wa aynu mosir oirawkitupa kusu rap wa okay[10].
天から人間のくにではたらきに下りてきている。
0 0　sino ison wa ipeno kor okay rok awa
たいへんな狩上手で、良い食事をして暮らしていたのだが、

p.5
【原文翻刻】
neokai　s isak　rametok　utar neyakka　kes to　rikikino　ekimne yakka　omuken　tane s ino　kirorasap　uyaikouye ekere　s iri　nukar　iki　ene yainu　n i　ukoeramunin kamui　ne yakka　tan keman　otta　inu　mos ir kata　okai somo　inu mos ir
【現代表記・日本語訳】
0501　neokay sisak rametok utar ne yakka kesto arikikino ekimne yakka omuken.
それらの真の勇者たちであっても、毎日精を出して山に猟に入っても獲物がとれない。
0502　tane sino kirorasap uyaykouepeker siri a=nukar　iki ene yaynu=an　i
今やたいそう痩せこけて、皆で気を揉んでいる様子を私は見て、このように思った――
050　a=ukoeramunin kamuy a=ne yakka tan keman or　ta aynu mosir ka ta
〈皆に気づかれないカムイで私はあっても、この飢饉の時に人間のくにで
050　aokay somo aynu mosir
私が人間のくにを

p.
【原文翻刻】

---

8 「a-「われ」ram「心」nukare「見さす」，心で見抜いている」【ユーカラ集 1】p.8
9 この単語については金成マツの筆録したものの中で、iyokunnure と iyokunure と二つの語形のあいだで揺れが見られる。この物語のなかでも、ここでは iyokunnure になっているが、 70 および 5202 行目においては iyokunure になってい r 。
10 天（kanto）からかせぎのために人間の世界に下りて来ているという設定で登場するカムイとしては、金成マツ筆録の散文説話においては、他にシカ【鹿の妻】、キツネ【六人の山子】、クマ【煙管が話す】、カッケン【ユーカラ集 2】が確認できている。これに先行する幾つかの行を読むと、人間世界にいるあらゆるカムイが金成マツにとっては「天から降ろされて」あるようだ。

kas i ao iuki yakun s ine kamuika inu mos ir kas io iuki kamui samnoine ramu an kusu s i ini an wa i op[11] sewa nei s ine nu uri oika ine orkeu kamui wak us iketa omanan kani ise toitukari

【現代表記・日本語訳】

0 01 kasi a=opiwki yakun

守護しなければ

0 02 sine kamuy ka aynu mosir kasi opiwki kamuy isam noyne iramu=an kusu

まったく人間のくにを守護するカムイが他にいなさそうに〉私は思うので、

0 0 sipini=an wa piw op[12] a=se wa[1] ne sine nupuri a=oika ine

私は支度をして、火打石入れを背負って、その一つの山を越えて

0 0 orkew kamuy ewak usike ta oman=an.

オオカミのカムイが住まうところに行く。

0 05 kani ise toy tukari

金の家が土から生えたようにそびえ立ち

p.7

【原文翻刻】

kokinnatara[1] ise soita omanan wa s imus is ka an ise oro umus kane umas aine kanakankunip a a otta e eipa[15] nukar kusu otuimas irwa nukar yakka pirika ruwe erayap a orkeu kamui kottures i tap s isam un nukar e mas kin enewapoka

【現代表記・日本語訳】

0701 kokinnatara.

きらびやかである。

0702 ise soy ta oman=an wa simusiska=an.

家の外に私は行って、［訪いを知らせる］咳払いをする。

070 ise oro umus kane umas ayne[1]

---

[11] ノートの右に「 iu i op」と書き込みがある。

[12] 他の記録を見ても金成マツはどうもこの単語を iu op と書くようであり、ここでは u がさらに落ちているようだがそのような例は管見の限り他には見られない。翻刻でも piw iop（ piw i-o-p）ではなく、短くなった piw op と表記することにする。

[1] この火打ち石入れの中に、後に出てくる増殖する穀物のタネとなるものが入っている。

[1] 横に「土ニ ッテヰテ光リガサス」と書き込みがある（ は判読不能、「建」であろうか)。

[15] 横に「頭カシゲテミル、首ヲアゲテ」と書き込みがある。

[1] 参考例として as i tapka umus kane umas iki「山頂の頂に 音がした ようだったから」

家の中で音がするのが聞こえたあげくに、

070　kanakan kuni p apa or　ta　e　eypa[17]　a=nukar kusu

いかなる者だかが戸口のところで覗き、私はそれを見ようとして

0705　otuymasir wa a=nukar yakka

遠くから私は見るのではあっても

070　pirka ruwe a=erayap a　orkew kamuy kor　turesi

その美しい相貌に私が感嘆したオオカミのカムイの妹が、

0707　tap sisam un a=nukar pe ene wa poka

こう自分のすぐそばで私が見る者が、何とも

p.8

【原文翻刻】

rekaika　sam kamui ne　kusu　kamui-　or annoyekar[18]　eko　ayep ne[19]　kusu　sattek s　iri　ottumkonna　s　umnatara　urari　s　ikes　itaiki　ori　ak kane　tukarike　ko　epokiki　eneitak　i　tanto ouse　s　inenne　nan　yu　u tari　ekimne wa　naa ponno　s　iranko

【現代表記・日本語訳】

0801　a=reka　i ka isam[20]. kamuy ne kusu kamuy ipor annoyekar

言いようがない［ほど素晴らしく美しい］。カムイであるからカムイなる容貌をまとい、

0802　ipe ko　aye p ne kusu sattek siri ipor　tum konna sumnatara.

食べ物が不足しているものだから、痩せて、顔色が萎れている様子だ。

080　a=urari sikesitayki oripak kane

【ユーカラ集 8】p.185。【ユーカラ集 7】p. 19 には、tum　u oro　umas　kane　umas　aine「曹司の中声がする。　さんざん声がして」という箇所があるが、これも最初が　umus　である可能性があるだろうか。なお金成マツの筆記体においては、u と a の見分けがつきづらいが、ここの箇所では意識して a の上を閉じて書き分けようとしているようだ。

[17] この単語は他の地域では　e　ewpa という複数形になるが（単数形は　e　ewe)、幌別では　e　eypa という語形が記録されている【方言辞典】p.　幌別。単数形はここでも　e　ewe であるようだ【久保寺辞典稿】p.87。

[18] 横に「神ノカホイロソノママ」と書き込みがある。

[19] 横に「食フモノ足ラナイモノデ」と書き込みがある。

[20] 金成マツは英雄叙事詩で kamuy ne kusu ene wa poka a=reka　i ka isam という常套句を用いることがあるが（【ユーカラ集　】p.10 、【ユーカラ集 5】p. 08)、そうするとすると、ここでの a=reka　i ka isam は後ろの kamuy にかかっており、文は切れていないのだろうか。これとは別に kamuy ne kusu kamuy ipor annoyekar という表現もあり（【ユーカラ集 5】p.70)、ここではこの 2 つの表現が一箇所に重ねられたような形になっている。

［オオカミの妹は］私の靄を目で打ち払い、

080　i=tukarike ko epokiki ene itak i

遠慮しながら私の手前に頭を下げ、このように言う――

0805　tanto ouse sinen ne an=an. a=yuputari ekimne wa naa ponno siran ko

「今日はたった一人で私はいるのです。兄たちは山猟に行って、もうしばらくしたら

p.9

【原文翻刻】

ap nankor kusu　newa tapne　kamui　ayekais iri　okai nepka　u arosukepka　sam yakka　upwa　ouse s inipoka　kiwa ikoreyan ari　takkor　un wa　munnuipa　okar　umas　ori ak ankane　un an wa　nkaranko　neapkusu　kamui　utara　nis panewa　s iran nankoro[21]

【現代表記・日本語訳】

0901　sap nankor kusu ne wa[22] tapne kamuy payekay[2]　siri okay.

山を下りてくるでしょうから、こうカムイが訪ねてきている様子です。

0902　nep ka a=uparosuke p ka isam yakka

何か一緒に食べるためを煮炊きをする物もありませんが、

090　a up wa ouse sini poka ki wa i=kore yan

入ってただ休むだけでもして下さいな」

090　ari itak kor a un wa munnuypa sokar　umas.

と言いながら、中に入って掃き掃除をし、座を整える音がする。

0905　oripak=an kane a un=an wa inkar=an ko

私はかしこまって中に入って辺りを見てみると

090　ineapkusu kamuy utar nispa ne wa siran nankor y a

なんとまあカムイたちが裕福な長者である様子だろうか

---

[21] 金成マツの同種の箇所からは nankora が予想されるところであり、下の現代表記ではそのように解釈して修正をした。

[22] 金田一京助は kusu ne wa（あるいは kusu newa）を一貫して「そのために」と訳している（【虎杖別伝】 7 1 および 51 0 行目、【ユーカラ集 5 】p.185、 817 行目）。ここでも文脈からすると、そのようなつながりになっているようだ。

[2] payekay は「歩き回る」という意味で用いられるが、【方言辞典】p. 12 には帯広での用例として aynu payeykay　nen ka y payekay で「誰か家に来る」という意味になるとの記述があり、ここではそれに類似した使われ方になっているのではないか。【カワウソが私に化ける 1】においても、主人公のオタストゥンクルに対し許嫁のモイサムンマッが同じ表現を用いており（p.1 0）、そこでは「歩き回る」と訳したが、これも「家に来る、訪れる」という訳が適切であったかもしれない。

p.10

【原文翻刻】

ise s ikno kamui kor e eekirtek kane ise os ke unno reka kas pa okaetokne e orari arkisotta ponmenoko otop inki es it iure oripakwa okai nu ur e ne kusu raunkane newa ek e nep kamui neruweneya s inri i unara koran rokamkino

【現代表記・日本語訳】

1001 ise sikno kamuykorpe eekirtek[2] kane ise oske unno a=reka kaspa.

家を一杯にするほど宝物が並び、家の中まで私は幾らでも称賛する（ほど素晴らしい）。

1002 okaetok ne a=e orari

炉の上座に私は座り

100 arkisotta pon menoko otop inki esit iwre[25] oripak wa okay.

左座に少女が髪の毛の裾を床につけ、かしこまっている。

100 nupur pe ne kusu raunkane[2] ne wa

巫力が強い者なので、ひそかに

1005 ek pe nep kamuy a=ne ruwe ne ya a=sinri i unara kor an.

来訪者の私が何のカムイであるのか、私の素性を探っている。

p.11

【原文翻刻】

kipne kusu s iketoko urar otte nkaranko rponnoka ep ui eka sam ouse u otta s ine sat ep rkenewa s ine tanki akno an irkep atek aru kas kamui ne ukas kamui ne ns iri nukar tane tokes

---

[2] この物語の 1 ページ目では、a=uni tan poro ise kamuykorpe eekirtekka とあり、そこでは eekirtekka となっていた。一方で、ここでのように後ろに kane がくると eekirtek となる傾向があるようで、例えば【ユーカラシリーズ 】pp.10 -7 には tam oro ise amanem oki ii iyere kamui koro e eekirtek kane「この大きい家は 神の宝列が 行き桁の下まで ぎっしりと積み上がり そこに満ちて」という箇所が見える。これらの箇所では特に kane が eekirtekka ne と分解できそうにもない。何か英雄叙事詩を語る際の音節数の配置が、この語形の揺れに影響しているのであろうか。

[25] . iso-sam ta otop inki aes it iure anan ra okita「正座のがわに 髪の毛の端を わたしは下につけて わたしじっとしていたその間に」。 inki に注が付けられ、「襟まで垂れてある髪の毛をば、じっと畳の上にその端をつけて、仰ぎ見ることなく顔を俯せて敬み居る姿」とある（【ユーカラ集 1 】p.115）。

[2] 「内心」【ユーカラ集 1 】p.287、「ひそかに」【ユーカラ集 6 】p.2 。

【現代表記・日本語訳】

1101　arokamkino[27] a=ki p ne kusu sik etoko a=urarotte inkar=an ko

わざと私がすることなので、彼女の目の前に私は靄をかけて辺りを眺めると

1102　arponnoka aep uype ka isam.

まったく少しも食べ物の屑もない。

110　ouse pu or　ta sine sat ep arke ne wa sine itanki pakno an pirkep patek

ただ倉庫に一つの干し魚の半分や、お椀一杯分くらいある穀物ばかりが

110　aru kaskamuy ne pu kaskamuy[28] ne an siri a=nukar.

食糧の守り神として、倉庫の守り神としてある様子を私は見る。

1105　tane tokes an ko

今や夕方になると

p.12

【原文翻刻】

nko　ise samkata　inu sap　umas　awa　nea ponmenoko　soinewa　ankeno　k an i yenoine　ramu anko　kanakatkor e　utar　soyos i itatpa wa　upwa　nkaranko　uirwakne kamui　utara　kani kosonte　rutome　iu　o ittano　erusui e ne　kusu

【現代表記・日本語訳】

1201　ise samka ta aynu sap　umas awa

家のそばで人が山から下りてくる音がしたところ

1202　nea pon menoko soyne wa

その少女が外に出て、

120　ankeno ek=an　i ye noyne iramu=an ko

近いところから私が来ていることを言っているようだと私は思っていると、

120　kanakatkorpe utar soyosipitatpa wa a up wa inkar=an ko

---

[27] 元々は okamkir「わざと、意図的に」に-no がついているが、金成マツの筆録資料においては okamkinno と書かれている箇所は管見の限り見当たらず、全てが okamkino になっている。また、okamkino（【民譚集】p.112、【神謡集】p.2　など）以外に、siokamkino（【民譚集】p.11　など）、ここでの arokamkino、そして arsiokamkino（【煙管が話す】p.12 、【ユーカラ集　】p.201 など）といった語形のバリエーションがあるようである。

[28] このことについては、この物語内の後ろでオオカミのカムイの兄弟自身による説明があり、少しばかりの穀物を必ず倉庫や食料の守り神（kaskamuy）としてとっておくものであり、どんなに飢饉がひどくてもこれには手をつけないしきたりであるようだ。ただし、この主人公のオコジョ（雪狐）のカムイは、オオカミの妹にそのようなしきたりを踏み破らせるという悪戯に出る。

いかなる人たちだかが外で身支度を解いて入ってきて、私は眺めると、

1205　uirwakne kamuy utar kani kosonte arutome iw.

兄弟のカムイたちが金の小袖を幾重にも重ね着をしている。

120　opittano iperusuy pe ne kusu

皆が腹を空かせているものだから

p.1

【原文翻刻】

attek s iri tumsak s iri ori ak kane tunnewa s isosamne orarpa s irki iki tekriki kur uni kane erankarap ukoeramunin kuru ane wa nan awa keman neyakka senne saure ans iri okai wa kusu inu kotan otanukar kusu tantone yaiapkas te

【現代表記・日本語訳】

1 01　sattek siri tumsak siri oripak kane tun ne wa siso sam ne e orarpa.

痩せている様子、弱々しい様子で、畏まって二人で右座に鎮座する。

1 02　sirki iki a=tekrikikur-puni kane a=erankarap

そうしたら私は手を高く差し上げて、挨拶を述べる。

1 0　a=ukoeramunin kur a=ne wa an=an awa

皆に気づかれない者で私はあって、暮らしていたのですが、

1 0　keman ne yakka senne sawre an siri okay wa kusu

飢饉になることでも並大抵ではない様子があるので、

1 05　aynu kotan a= otanukar kusu tanto ne[29] yayapkaste=an [0] kor

---

[29] tanto「今日」は副詞として動詞に直接かかることができるが、この tanto ne という形も英雄叙事詩を中心として確認することができる。例として、seenne ka suy ene ne kuni a=ramu rok i tap tanto ne oro oma wa isam「まさかまた　こうなるだろうとは　私は思いもかけなかったのに　今日たった今しがた　死んでしまった」【ユーカラシリーズ　】p.　。

[0] yay-apkas-te「自らを・歩く・～させる」で、辞書類には記載が見えないが、幌別と沙流を中心に用例が幾つか記録されている。aokay utar anakne sinnay kotan eyayopepe p a=ne korka owse irukay yayapkaste=an awa「私たちは別の村をヤヨペペ（不明）する者でありますが、ほんのしばらく歩いたところで」【知里真志保フィールドノート　】「1.2 子無き梁井村人の許へ六青年来りて養子になる事」p.22。 nep oruspe kusu tan tanepo sinewpa=an kus payoka=an i ta yayapkaste=an i ta sekor aweoka「どんな噂があるというので、たった今遊びに行こうと私たちがやって来たときに、歩いて来た時に」【神話集成 7】平賀サダモ「戦が終わった戦いも終わった（tumi suykere wenpe suykere）」 17 行目（pp.7 -7、訳は筆者が補った）など。

なお、上記箇所で「不明」となっている eyayopepe p は「隣り合って住んでいる者」ではないかと思われる。【　研アーカイブ】「uwepeker ウウェペケレ民話 1 」注 71 を参照。

人間の村を私は見舞いに今日の日に歩き回っていると

p.1

【原文翻刻】

nkor kamuine okai utar ekimne noine ramu ankusu s irkus anruwene nekon neruwe taan keman neyakka s ino yupke ruweneko kes to e ie kimne s iri nepka ikoikip ene okai ruwe ean ep ene okai ruwe ean takan awa

【現代表記・日本語訳】

1 01 kamuy ne okay utar ekimne noyne iramu=an kusu sirkus=an [1] ruwe ne.

カムイとしていらっしゃる方々が山猟に行っているように思ったので、立ち寄ったのです。

1 02 nekon ne ruwe ta an keman ne yakka sino yupke ruwe ne ko

どうでしょうか。飢饉になってとても厳しいことですと、

1 0 kesto e i=ekimne siri nep ka ikoykip ene okay ruwe e an

毎日あなた方が山へ猟に行って、何か獲物などあるものでしょうか、

1 0 ep ene okay ruwe e an

魚などあるものでしょうか」

1 05 itak=an awa

と私が述べたところ、

p.15

【原文翻刻】

kamui utara s ine itak eupaemko uina awe eneokaii yuk ikoikip sonno oronno nne to a a ukatateterke koroka nepkusu neya oarponnoka aie ankere [2] eaikapruwene et otta ene ene t s iri okai ep ene ponnoka op e ankere

【現代表記・日本語訳】

1501 kamuy utar sine itak eupaemkouyna awe ene okay i

カムイたちはひとつ言葉に互いの口尻を捉えてこのように言う――

1502 yuk ikoykip sonno poronno inne topa a ukatateterke korka

「鹿は本当にたくさん、大勢の群れが押し合い踏み合いしていますが、

---

[1] sirkus「立ち寄る」【久保寺辞典稿】p. 7、「立寄リ行ク. .t. o pass y」【バチラー辞典】p. 7。

[2] この行の右手に「ドシテモ近ヨレナイ」とあり、行を変えて「(ニトネカムイタルカラナラン)」とある。

「pa「口」emko「半分」uina「拾う、取る」。異口同音にいう状。互に口の半分を（まだ全部を言わない内に）拾って言う」【ユーカラ集１】p.198。

150　　nep kusu ne ya oarponnoka a=aye ankere eaykap ruwe ne.
なぜだろうか、全く少しも矢を近くに届かせることができないのです。
1505　　pet or ta ene ene at siri okay ep ene
川でも、そのように群れている鮭でも、
150　　ponno ka a=ope ankere
少しも槍を届かせることが

p.1

【原文翻刻】

eaikap ruwene korka mono ise otta okai an yakka erusui nkusu nekon oka newa kamui eram okenwa s ine ep poka s ine yukpoka ari yainu an kusu kes to ene ouse s inki takup koitupa atek ki aine sa anranke

【現代表記・日本語訳】

1 01　　eaykap ruwe ne korka
できないのですが、
1 02　　mono ise or ta okay=an yakka iperusuy=an kusu
じっと家にいても腹が減りますから
1 0　　nekon poka ne wa kamuy i=erampoken wa
〈どうにかカムイが私たちを気の毒に思って、
1 0　　sinep ep poka sine yuk poka
鮭一匹でも鹿一頭でも（とらせてくれないだろうか)〉
1 05　　ari yaynu=an kusu [5]
と私たちは思いますから、

p.17

【原文翻刻】

utari utar neyakka tane kemekot wa o umpa koyaikus inu utar ene e unkine kusune rok e tane nakne okin utari kemekot s iri eram oken kusu kas iao iuki

---

ここで話しているのもオオカミのカムイなのだが、人間が話すかのようにカムイの加護を願っている。

[5] どうも（原ノートでの）次のページへと進んだ際に、ここの kusu から次に話がうまくつながっていないようだ。何か ekimne=an korka「山に入るのだけれども」などの内容が飛ばされた可能性があるだろうか。

この行の右側に「下ノモノ　小供ナド手下ノモノ」と書き込みがある。

rusui kusu　ene kes　to　tane tun　　nepatek　moimoikep　　newa　s　iarikikino

【現代表記・日本語訳】

1701　　a=utari utar ne yakka [7]　tane kemekot wa　opunpa koyaykus.

村人［他のカムイ］たちも今は餓え死にをして、戻ることができません。

1702　　aynu utar　ene a=epunkine kusu ne rok pe

人間たちをも私たちは守ることになっていましたが、

170　　tane anakne pokin utari kemekot siri a=erampoken kusu

今は弱い者たちが飢え死にする様子を私たちは気の毒に思いますから、

170　　kasi a=opiwki rusuy kusu

助けたいと思うので、

1705　　ene kes to tane tun a=ne patek moymoyke p a=ne wa

このように毎日今は私たち二人だけであれこれ動いて

p.18

【原文翻刻】

ekimne an　koroka　　koyaikus [8]　s　irine ari　kamui　utara　　awe okai.　　et　ekar　　isatta [9]

s　inetonena　　turawa　　kore yan　　ka un　s　ine　pon yuk　　ene s　ine　pon　　ep　　ene　　tomotna [0]

takan awa　ene　aweokai i　tanetane　oartusmak

【現代表記・日本語訳】

1801　　siarikikino ekimne=an korka a=koyaykus siri ne [1]

本当に一生懸命になって山猟をしますが、うまくいかないようです」

1802　　ari kamuy utar　aweokay. a=　et　ekar [2]

---

[7] ここでは人間が「私の村人たち、同胞たち」と言う際の表現が用いられている。ここでは、カムイから見た人間たちは aynu utar　ene と表現されているので、カムイも人間の世界では人間と同様に村を形成していて、自身の同胞たちを人間と同様に a=utari utar　ene と表現するらしいことがこの箇所から見てとれる。

[8] us の上に「クシ」と書き込みがあり、また行の右手に「ヤレナイ」と書き込みがある。

[9] 行の右手に「アシタ一日ダケ」と書き込みがある。

[0] 行の右手に「トル」と書き込みがある。

[1] ここで、オオカミの兄弟が自分たちの行動について述べているにも関わらず視覚的情報を示す siri が使われていることが興味深い。何かこの「うまくいかない」というのが、自分たちによく分かっていないことがあるということで、視覚的情報として表現されるのであろうか。

[2]　et　ekar という動詞の用例は他に見つからないが、ここでは他動詞の人称接辞がついており、自動詞　et　e に他動詞形成接尾辞の-kar がついたのであろう。意味としては「～に相槌をうつ」となるだろうか。

とカムイたちが話す。私は相槌を打ち、

180　nisatta sine to ne na　i=tura wa i=kore yan.

「明日一日（？）私を連れて行ってくださいな。

180　ikaun　sine pon yuk　ene sine pon　ep　ene a=tomot na

もしかしたら、小さな鹿の一頭なり、小さな魚の一匹なりとも行き合いますよ」

1805　itak=an awa ene　aweokay　i

と私が言ったところ、［その二人は］このように言う――

180　tane tane oar tumsak [5]

「もうもう完全に力がなく

p.19

【原文翻刻】

kirorasap an　rai anke　yainu an　koroka　kamui　eram　oken kusu　turarusui　awene　yakun rais　irine ne　yakka　kamui　kor iwor　etura　kusune ari　awe okai　kamui　utara ene　yainu s　iri o　ittano　kus　na- [7]　nukara [8]　newa

【現代表記・日本語訳】

1901　kirorasap=an ray anke yaynu=an korka kamuy i=erampoken kusu

痩せて、死にそうだと私たちは思っていますが、カムイが私たちを気の毒に思い

1902　i=tura rusuy　awe ne yakun ray siri ne ne yakka [9]

なぜここが na となっているのかがよく分からず、また他に似たような用例が見つからない。ikaun「若しかして」【久保寺辞典稿】p.10 。

[5] この oartusmak には人称接辞がつかずに、その次の kirorasap には人称接辞がついている。行の右手に「シンダヤウニナッテモ」と書き込みがある。

[7] 行の右手に「トホシテミル」と書き込みがある。

[8] 行の右手に「予見（人ノ心ヲ）」と書き込みがある。

[9] このように siri ne の後ろに ne yakka を重ねるのは、沙流地方にも川上まつ子に po korayniwkes kusu ray siri ne ne yakka a=e=kirare kusu ne na「そのままにはしておけないので、死んでもおまえを逃がしてやろう」【白老アーカイブ】川上まつ子「伝染病の神とねたむ人間たち」1095-　行目という用例が記録されている。それぞれ ray が本来は主人公の行為であるが人称接辞がついていないので、固定された表現として成立しているということか。

また、siri ne の後ろに ne を重ねるのは、以下のような用例が見えるが、これは 1 行の音節数を合わせるという理由で説明できそうである――oya　iki　kamui s　irine ne　s　innai　ise　aeresup　ikai matka　i　nerok okaipe「どうやら　神の如くに　別の家に　育てられたる　幼い少女　だったのに」【ユーカラ集　】p.290。tan kora　i　is patek　i=ki yakun　i=kor　totto　ante itak　i=kasi　siri ne ne yaynu=as kusu「このように　泣いてばかりで　いては　私のお母さんが　言い残した言葉に　逆ら

一緒に行きたいという話であれば、死んでも

190　kamuy a=kor iwor a=e=tura kusu ne

カムイどのを私たちの猟場へとお連れしましょう」

190　ari　aweokay.

と言う。

1905　kamuy utar ene yaynu siri opittano a=kusnanukar[50]

カムイたちが次のように考えている様子を全て私は通し見る――

p.20

【原文翻刻】

ek kamui　taan　nepka　suyepka　sam　u otta　ouse s　ine　sat　ep　rkenewa　s　ineitankine　mam　atek an　us　kotoiwano　kamui　upas　kuma　m　e　nekona　keman　yupke tane　s　uoro aop　sam yakka　uotta ponno　u　aru

【現代表記・日本語訳】

2001　ne wa[51]　ek kamuy ta an. nep ka a=suye p ka isam

〈どこから来たカムイなのだろうか。何も煮炊きするものもなく、

2002　pu or　ta ouse sine sat　ep arke ne wa sine itanki ne amam patek an.

倉庫にただ一尾の干し魚の半分や、お椀一杯分の穀物ばかりがある。

200　uskotoy wano kamuy upaskuma an pe

昔からカムイの言い伝えがあることには、

200　nekona keman yupke tane su oro aop isam yakka

『どれほど飢饉がひどく、もう倉庫に入っている物がなくなったとしても、

2005　pu or　ta ponno pu　aru

倉庫に少し、倉庫の食糧、

p.21

【原文翻刻】

ukas　kamui　an tepne ari　awas　kusu　taan poon　ep kamui　aroaos　uyeko　ukas　kamui

---

うことになる　ようだと　思いましたので」【知里幸恵神謡】「ケソラプの神」p.50。

50 「通して見る、透視する、見ぬく」【久保寺辞典稿】p.17 ；kus　na「通して」nukar「見る」【ユーカラ集 1】p.157。

51 幌別の金成マツの記録においては、「どこから」と言う際に、ney wa ではなく ne wa という形が用いられる【方言辞典】p. 1 。

samyakun poo keman yupke nekona ki i anko[52] pirika ruwetaan ari rennewa unepkorokane[5] yainu wa keutum otta is kor okai[5] s inri i unarpako s iketoko urarkus te

【現代表記・日本語訳】

2101 pu kaskamuy a=ante p ne

倉庫の守り神を置いておくものなのだ』

2102 ari awas kusu taan poon aep kamuy paro a=osuye[55] ko

と言うから、このようにほんの僅かしかない食べ物をカムイに食べさせてしまって

210 pu kaskamuy isam yakun poo keman yupke.

倉庫の守り神がなくなってしまうなら、なおさら飢饉がひどくなる。

210 nekona iki i=an ko pirka ruwe ta an〉

私たちはどのようにすればよいだろうか>

2105 ari ren ne wa unepkor[5] kane yaynu wa kewtum or ta is kor okay.

と３人が同じように考えて、心で泣いている。

210 a=sinri i i unarpa ko siketoko a=urarkuste[57].

私の素性を［この３人が］探ると、この者たちの目前に私は靄をかける。

p.22

【原文翻刻】

nepsui kamui utara erampoken neyakka eramis kare s iokamkino kipne kusu ponmenoko nimak[58] utur- koturitek ike o uni wa pons u urayewa orowakkaowa

---

[52] この行から２行をかけて右側に「自分ガ考ヘテル㆓この神／洞見スル」との書き込みがある（「㆓」は「事」の略字である）。この「洞」は「洞察」で用いられる「洞」であろう。

[5] この行の右側に「同ジク」との書き込みがある。

[5] この行の右側に「思ッテ泣イテル」との書き込みがある。

[55] par o osuke という連他動詞は頻繁にみられるが、par o osuye は金成マツの他のテキストを含めて例を見出すことができない。この連動詞の形では、金成マツも par o osuke を用いている。「煮炊きをする」について金成マツは suke ではなく suye というかたちを用いるが、それが何か影響した可能性があるだろうか。

[5] 「unepkoro 同様ノ a . ike」【バチラー辞典】p.5 。

[57] 主人公の雪狐（オコジョ）のカムイは、オオカミのカムイたちの素性を分かっているので、巫力で雪狐（オコジョ）のカムイがオオカミのカムイに勝っていることになる。

[58] この行は当初 nimakak と書かれて、最後の ak が消されている。

また、この行から４行をかけて、右側に「ダレモシラヌヤウニ歯ノ間／ヲ チョピット合図する㆓／イハレヌ㆓チョットシラセルトキ／メクバセノヤウナ」という書き込みがある。

oka otte orowa　uotta an　oarsat　ep newa　s　ine itankine　mam　rapte wa　nea amam

【現代表記・日本語訳】

2201　nep suy kamuy utar a=erampoken ne yakka a=eramiskare[59].

なんとまたカムイたちのことを私は気の毒に思うことか分からない。

2202　siokamkino a=ki p ne kusu [0]

わざと私はすることに

220　pon menoko nimak utur a=koturi tek ayke [1]

その少女へと歯のあいだを私はちょっと延ばしたところ（まじないをかけたところ）

220　opuni wa pon su　uraye wa oro wakka o wa　okaotte [2].

［少女は］立ち上がって小さな鍋を洗って、そこに水を入れて炉にかける。

2205　orowa pu or　ta an oar sat　ep ne wa sine itanki ne amam rapte wa

それから倉庫にある、すっかり干からびてしまった魚やお椀一杯分の穀物を下ろして

220　nea amam

その穀物の

p.2

---

[59] 金成マツはこの eramuskare の前に yakka または akka を置くことがたまにあり（akka になるのは直前が人称接辞の=an のとき）、それよりも ya から eramuskare につなぐかたちの方が用例の数が多いが、ya ka eramuskare と書かれている用例は管見のところ見当たらない。

[0] s　iokamkino　akip ne kusu「わざと　わがすることで」【ユーカラ集　】p.　1。

[1] 【知里幸恵ウウェペケレ】所収のこの物語の類話に　arkisotta oripak wa an pon menoko nimak uturu a=koturitek ko　opuni wa pon su　oka otte「左座に慎ましくしている娘に私は方術を施してやりますと」という箇所がある（p.　、すぐ続く p. 5 にも類似の用例がある）。知里幸恵自身はその箇所に「法を施してやると」と訳をつけた上で、物語末尾に「　imak uturu ako turi tek といふのを、日本語に何うなほしたら当るかをいくら考えても言葉を思浮べることが出来ません／催眠術とでもいふのでせうか」と金田一へのメッセージを付している（引用中の「／」はノートにおける改行を示す）。いずれにしても、ここでの方術というか催眠術は、歯の間で繰り出すものであるらしい。

　また、原ノートのこの物語の筆録が終わった次のページに、金田一京助が（この物語とは関係ないと思われる）様々な事項を聞きとっている記録があるが、その中にこの動作の説明があるので、以下に翻刻する――「思フ ㄱヲ nimak utur turi スルト　電信ノヤウ　思ヒガトゞク　／　ニマクカラ思ガ送ラレル　神ダカラ　ワカル　人ニミセナイ様ニ　手ヤ　／　身振デセズニ nimak デスルニ（？）」（「／」は行が替わっていることを示す）。

[2] ここは、 oka otte でも　okaotte でも良さそうだが、知里幸恵に　i=　okaotte、金成マツに a=　okaotte という用例があり、逆に　oka　i=otte や　oka a=otte という用例は管見の限り見つからないため、一語としてとっておくことにする。

【原文翻刻】

pon mes i karwa yanke ine s inenepo eokere pons u toiko kemwa ukauo [5] eas ir pons u oro sui nea sat ep tuipatuipa wa o s uyewa sui s inenne keranno ea ea ruri i unno o ittano niwa okere [7] okake eyayoka as te [8] ine is

【現代表記・日本語訳】

2 01 pon mesi kar [9] wa yanke ine sinennepo[70] e okere.

小さな飯を炊いて、よそって、たった一人でそれを食べてしまう。

2 02 pon su toykokem wa ukao[71].

小さな鍋をひたすら舐めて、それをしまう。

2 0 easir pon su oro suy nea sat ep tuypa tuypa wa o.

今度は小さな鍋にまたその干し魚を切って切って（刻んで）入れる。

2 0 suye wa suy sinenne keranno e a e a ruri i unno opittano ni wa okere.

それを煮て、またひとりで美味しそうに食べて食べて、汁まで全部吸ってしまう。

2 05 okake eyayokapaste ine is kor okay.

その後、そのことに後悔して泣いている。

この行の横に「コノ神ノイタヅラナラン」と書き込みがある。

この行の横に「ナメタ」と書き込みがある。

5 この行の横に「シマツタ」と書き込みがある。

この行の横に「ツユモミナノンデシマフ」と書き込みがある。

7 この行の横に「吸フヤウニノム　ススリノム」と書き込みがある。

8 この行の横に「アアトクヤムスマナイ／　ト思ツタ」と書き込みがある（　は「廿」の下の横棒がなくなったような字）。

9 kar は 2 項動詞で「～を作る」であるとすると、pon mesi はノートの直前のページの nea amam とのあいだで、「その穀物の小さな飯」という関係にあることになるか。あるいは、nea amam の後ろに ari「～でもって」などが抜け落ちた可能性があるだろうか。amam mesi と二語でいう表現であれば【ユーカラ集　】p.209 に見ることができる。

70 「一人だけで」を表現するのに sinen ne に-po をつけるのは幌別のアイヌ語の特徴のようで、沙流では sinen ne poka となるようだ（【音声資料 1】p.2　など）。他に arsinennepo と ar-が付いたり（【ユーカラ集 8】p.157、知里幸恵筆録部分）、oarsinennepo となることもある（【ユーカラシリーズ 1】p.21）。

71 ノートに ukauo と書かれているが、間の u は渡り音であろうか。また、この ukao は【方言辞典】において、他の地域が「しまう（片づける）」とあるところを、幌別では「重ねる」となっているが、ここでの使われ方や金田一の書き込みからは、幌別でも「しまう」の意味で使われていたことが確認できたということになりそうだ。

p.2

【原文翻刻】

korokai[727]　kamui　utara　keutum otta　s ino irus ka　wentures i　otui ike　sonno etapne katkor s iri　okai　atek an　arukas kamui　kamui　ene　aro　os uke　s irine kuni　ramu awa s inennepo　ewa ene s irki i　taan　yakun　ponnorankepoka　o ittano　eimekkar

【現代表記・日本語訳】

2 01　kamuy utar kewtum or　ta sino iruska[7] .

カムイたち［オオカミの兄弟の方］は心の中でたいへん腹を立てる。

2 02　a=wenturesi a=otuy　ike[75] sonno　e tapne katkor siri okay.

〈私たちの悪い妹のやつめは、本当にこのような（あえりえない）振る舞いをすることだ。

2 0　patek an　aru kaskamuy kamuy　ene

ただそれだけ残った食糧の守り神を、［来訪した主人公の］カムイにでも

2 0　paro osuke siri ne kuni a=ramu awa[7]

食べさせるのであろうと思っていたのだが、

2 05　sinennepo e wa ene sirki　i ta an yakun

たった一人で食べて、このようなことになるなら、

---

[72] kor と okai のあいだに「 」（アポストロフィ）がふられている。管見の限り、他にがこの記号をふっている箇所は見当たらず、金田一京助が書き込んだ可能性があるか。

[7] この行の横に「泣イテタ神達」と書き込みがある。

[7] ここからオオカミのカムイの兄弟と妹それぞれの心内語が続くが、これら心の動き全てを主人公のオコジョ（雪狐）のカムイは見抜いていることになる。妹の動きを操ることに加え、この　人の心を全て読めるということは、主人公のカムイはオオカミのカムイより遥かにカムイとしての力が強いことになるか。

[75] 参考――awen-yu i　aotuiike「わが悪兄の　ちくしょう」【ユーカラ集　】p.1 2。aotuiike には注がついており、「o「しっぽ」tui-ike「切れた・もの」罵言の語，a-「わが」。こんちくしょうめ！あんちくしょうめ！」とある。

[7] ここで形式名詞の siri が用いられていることから、兄弟の方は妹の行為について、目で見た印象でそのように思っていたことになる。目で見て、その先に起きるべきことを判断する際に siri を用いることができることが分かる。

また、ここから心内語が続くが、心内語のなかで情報源を示す形式名詞が多用されていることは興味深い。発話のコミュニケーションを通じて色々と確認できないような状況では、心の中で様々な推量をすることになり、これらの形式名詞が多用されることになるのだろうか。事実、オオカミのカムイの兄妹たちの心の動きを全て読みとっている主人公の雪狐（オコジョ）のカムイの叙述部分では、これらの形式名詞が使われない。

2 0　　ponno ranke poka[77] a=opittano i=eimekkar yakne
少し下ろしてくれるものだけでも我々皆に配ってくれれば、

p.25

【原文翻刻】

yakne ponnopoka sam e tumas nu noine am e kes to s inenne ise otta anwa tumas nu ruwe anko kas ikeun s inenne atek i e s iri an okai utara kes to somo i e anno s inki an s iri okaiko nepkatas i ponnoka eram okenka kipnewa ari yainukor keutum otta[78]

【現代表記・日本語訳】

2501　　ponno poka a=sampe tumasnu noyne an pe
少しばかりも我々の心がしっかりするだろうに

2502　　kes to sinen ne ise or ta an wa tumasnu ruwe[79] an ko
［妹は］毎日一人で家にいて力があるのであって、

250　　kasike un sinenne patek ipe siri[80] an.
その上に一人だけで食事をしているようだ。

250　　aokay utar kes to somo ipe=an no sinki=an siri[81] okay ko
我々は毎日ものも食わずに疲れているので、

---

[77] 副助詞の poka は、名詞の後ろや sonno poka のように副詞の後ろに入ることが多いように思われるが、ここでは ranke という副助詞の後ろに入っている。この物語の類話である知里幸恵の記録した物語にも、a=poutari nakka ekimne kusu paye wa sinki wa arki ko sinenot ranke poka a=ere no an pe「息子たちも　山へ行って　疲れて帰ってくるとき　一口ずつでも　食べさせたいものを」という表現があり（【知里幸恵ウウェペケレ】p. 8）、ranke の後ろに poka が来ているので、どうやらこのような表現の形が存在するようだ。

[78] keu の後ろに r と何かもう一つ字を書きかけた形跡があり、斜線で消されている。

[79] 妹の行為を不審がってこのように兄弟二人が思っているので、視覚情報に基づくことを示す形式名詞 siri を含め、外から推測するような表現が多く用いられているが、ここだけは事実や確証を示すような形式名詞 ruwe が用いられている。なぜ自分たち（兄弟たち）自身の事柄ではない内容に ruwe を用いていいのかは、考察する必要があるか。例えば、妹が家にいるために山を歩き回って疲れている自分たちよりは力があるということは、確信をもって述べてよいという判断だろうか。

[80] ここで形式名詞の siri が使われているということは、自分たちが今目で見たことに基づいて、実際には目撃していない普段の姿について推測する際にも siri を用いることができるということになる。

[81] ここで形式名詞の siri が使われているということは、自分たちが相手（妹）にそう見えているはずだということで、自分たちがそうであることは確実に言える事柄であろうが、妹への見え方を重視して siri を用いていることになるだろうか。

2505　nep ka tasi ponno ka i=erampoken ka ki p ne wa[82]

何か少しでも我々を気の毒に思うこともしてほしいものだなあ〉

250　ari yaynu kor kewtum or　ta

と考えながら、心の中で

p.2

【原文翻刻】

oronno　is　kor　okai yakka　eoripak ene　kusu　ene tures i　ko as orotaika　sampa ponmenoko　neyakka　s ino yayoka[8]　as te　sonno nepkamuye　s ikatkare　kusu　s inen ane　atek an[8]　arukas kamui　es iri an　nekona[85]　yu utari　koyayomap　umi okaiya　ari

【現代表記・日本語訳】

2 01　poronno　is kor okay yakka

大いに泣いているけれども

2 02　i=eoripak pe ne kusu ene turesi kopasrota　i ka isam pa.

私に遠慮をしているものだから、そのように妹を叱りつけることもできないでいる。

2 0　pon menoko ne yakka sino yayokapaste

少女もたいそう悔やみ

2 0　sonno nep kamuye a=sikatkare[8]　kusu

〈本当に何のカムイに私は憑かれて、

2 05　sinen a=ne patek an　aru kaskamuy a=e siri[87]　an.

私一人でそれしか残っていない食糧の守り神を食べている様子なのか。

2 0　nekona a=yuputari i=koyayomap　umi[88]　okay ya

どんなにか兄たちが私のことを情けないと思っているだろうか〉

---

[82] 文中に強調の副助詞 tasi が来た場合に、文末が ne ne で締められる形はあるが、ここでのように ne wa で終わる形は、管見の限り他に例が見つからない。

[8] この行の横に「コマッタナト／　マ（？）ナイ　ナゼコーイフ ㄱ／私シタノカト」と書き込みがある（「／」は行変えを示す、以下同様）。

[8] この行の横に「ソレダケタメテタモノヲドーシテ／ヒトリデタベタロー」と書き込みがある。

[85] この行の横に「ドンナニ兄ダチカナシイ／自分ウラメシカラント」と書き込みがある。

[8]　ikatkare「罹ル　カカル．.t.　o　e sei e　wit　a　isease or　e　i」（【バチラー辞典】p. 50）

[87] 自分自身の行為を述べるのであっても、それをなぜ自分がしたのか分からない場合には、このように視覚情報に基づくことを示す形式名詞 siri を用いることになるようだ。

[88] この一連の表現の中では、ここでだけ　umi が用いられている。兄二人が内心で思っていることは、言葉では言わないし、また表情からも判別できないので、このようにそれ以外の感覚に基づく形式名詞　umi が用いられるということであろうか。

p.27

【原文翻刻】

ainu wa is a is a newa am e poo kamui utara rus ka wentures i s inenne atek an ep eorowa nep is kar s iri ene an i taan nekon ikip ene apkusu taan kamui oman okaketa etoiko kikkik nkusu nena ari s ine yainu ki[89] korokai rauki mina kikane

【現代表記・日本語訳】

2701 ari yaynu wa is a is a.

と思って、泣きに泣いている。

2702 ne wa an pe poo kamuy utar ruska.

そのことに一層［兄の］カムイたちは腹を立てる。

270 a=wenturesi sinen ne patek an aep e

〈私らの悪い妹が一人で、それしかない食べ物を食べ、

270 orowa nep iskar[90] siri ene an i ta an.

それから何をこのように泣いているのであろうか。

2705 nekon iki p e=ne a p kusu[91] taan kamuy oman okake ta

おまえが何をするにしても、このカムイが行ってしまった後に

---

[89] この行の横に「同ジ思ヒヲシタ」と書き込みがある。

[90] ここでは動詞 is「泣く」に他動詞形成接尾辞-kar がついて iskar となっている。これは疑問詞が nep「何」であるため、nep を目的語としてとらなければいけないからであろうか。沙流地方に nep iskar pe tap ko awkor awe oka ya sekor「何のために声を出して 泣くの ですかと」【音声資料 8】p.8 という例が他に見える。静内地方では、【白老アーカイブ】 00 5 「悪い姉に殺されそうになったが滝の神に助けられた娘」17 行目で、織田ステノ氏が nep is i e=ki siri ene an i an「何をおまえはそのように泣いているのだ？」という言い方をしており、ここでは is が自動詞のままで使われているが、この場合は nep と is i が名詞（句）として同格になっており、これが後ろの他動詞 ki で受けられている（「何の泣くことをお前がする様子がこのようにあることか」）と考えられるか。

[91] apkusu：［助詞］接続助詞「しても」＝yakka kokusui【久保寺辞典稿】p.21。nekona ene katkor kuni p e=ne apkusu sino e=epirka siri an nankor y a 【民譚集】p.58。tumi e i=yanke ene ki apkusu e i=kor katu wen pe ne yak sinen a=ne sine eka i a=ne yakka ietuykunip e i=ne ruwe tapan「軍勢を上げることなどしたって、お前達の理由が悪いのであれば私は一人、一人の少年だけれども、死ぬのは（？）お前達なのだ」【知里真志保フィールドノート 】p.128「2.2 女装のポイヤウンペがアトゥイルプンクルと戦う」 1 行目。us iu ene ne apkusu ouse s ine pakes korar-i oikkeune「下郎でもたとえそうとても ただひとさしの 飲みさしを与えたこと を理由として」【ユーカラ集 1】p.1 2。

270　　e=toykokikkik=an kusu ne na

私らがお前のことをひどく叩いてやろうぞ〉

2707　　ari sine yaynu ki kor okay.

と一つ心に考えている。

2708　　rawki mina a=ki kane

心の中で私は笑って

p.28

【原文翻刻】

ponmenoko nimakutur koturi tek awa o uni wa iwan atus oros u okaottewa orowakka o oroa e are sui okake eyayoka as te wa is koro okai kamui utara tam e poo sino rus ka wentures i yainui neepkoro yainup somone tane yayekar[92] s irine oiyos irine

【現代表記・日本語訳】

2801　　pon menoko nimak utur a=koturitek awa

少女に歯のあいだを私はちょっと延ばしたところ（まじないをかけたところ）

2802　　opuni wa iwan at us poro su okaotte wa oro wakka o.

［少女は］立ち上がって六本の紐のついている大鍋を炉にかけ、そこに水を入れる。

280　　poro ape are suy okake eyayokapaste wa is kor okay.

大きな火を焚いて、また後からそのことを悔いて泣いている。

280　　kamuy utar tanpe poo sino ruska

カムイたちはこのことにさらにいっそう腹を立て

2805　　a=wenturesi yaynu i neepkor nepkor [9] yaynu p somo ne[9] .

〈私たちの悪妹は考えがおかしくなっている。

280　　tane yaykar siri ne oyyo siri ne.

今や別者になったようだ、魔物になったようだ。

p.29

【原文翻刻】

---

[92] yayokar と書かれているのを、別の筆跡（おそらく金田一京助）によって o が消され、上に ye と書き込まれている。

[9] 他の物語の記録を見ても、金成マツはこの単語を neepkor と書くときと nepkor と書くときがあるようだ。

[9] この部分は直訳すると「私たちの悪妹は［ふだん］考えるように考えるのでもない」となるだろうか。ここでは「何を考えているか分からない」という意味でとった。

sone pirika keutum kor e ene ikiitaan nepaekar e pons u neyakka rus kap wanatus[95] s u ari neps uye kusu ene ikiitaan senne poptewa kaotawa[9] ronnu kusu enekatkor i tan ari kamui utar yainuwa sino tures i i[97] s itomapa s ino aemina

【現代表記・日本語訳】

2901 sone pirka kewtum kor pe ene iki i ta an.

本当に心がきれいな者がこんなことをするのか。

2902 nep a=ekar pe pon su ne yakka a=ruska p

何かを作るのに使うのが小さい鍋であっても私たちは腹を立てるのに、

290 iwan at us su ari nep suye kusu ene iki i ta an.

六本の紐のついた鍋でいったい何をこのように煮ようとしているのか。

290 senne popte wa i=ka ota wa i=ronnu kusu ene katkor i ta an

もしや煮立たせて私たちの上にぶっかけて私たちを殺そうと、こうしているのか〉

2905 ari kamuy utar yaynu wa sino turesi i sitoma pa[98].

とカムイたちが考えて、大いに自分たちの妹のことを恐れている。

290 sino a=emina rusuy.

私はとても可笑しく思う。

p. 0

【原文翻刻】

rusui nenka somonukarno emko ure emkoretar s ine amamnum iu op orowa sankewa op iri[99] okus koran[100] oros uorun eyapkir[101] ponnos iran- tekko[102] nea oros u uta a rikta o unikane pirika mes i e ututke kane[10] s iran iki ene itakani nkar kusu

---

95 右側に「ソレヨリ大キイナベナイ程ノ大鍋」との書き込みがある。

9 右側に「モシナベ ネタタセテ 私等ヘ ブッカケルタメデハナイカ」との書き込みがある。

97 右側に「妹トテモオソロシクナッタ」との書き込みがある。

98 この複数の助動詞 pa がついている動詞 sitoma は、文脈からしてオオカミの兄弟の方が主語になるが、そうすると、他動詞ではあるが pa が動作の対象の複数ではなく、主語の複数をしめしていることになるだろうか。あるいは、ひたすら何度も妹のことを恐れているという、対象の複数性または多回性の解釈がだとうだろうか。

99 右側に「ニタチテポツポツ沸ク piri」との書き込みがある。

100 右側に「ニヘカヘル」との書き込みがある。

101 右側に「鍋ヘダレモミナイ米ヲ ナゲタ」との書き込みがある。

102 先に tetk と書こうとした跡があり（二つ目の t の横棒は引かれていない)、それが横線で消されている。

10 右側に「モリアゲル」との書き込みがある。

【現代表記・日本語訳】

001　nen ka somo nukar no

誰も見ないように、

002　emko　ure emko retar sine amam num piw　op orowa a=sanke wa

半分が赤く半分が白い一粒の穀物の粒を火打石入れから私は出して、

00　pop piri　okus[10]　kor an poro su or un a=eyapkir.

沸騰した泡が吹きこぼれている大きな鍋へと私は投げ入れる。

00　ponno siran tek ko nea poro su puta　a rik ta　opuni kane

やや間をおいて、その大鍋の蓋が上にもち上がって

005　pirka mesi epututke kane siran　iki[105]　ene itak=an　i

美味しそうなご飯があふれ出す様子なので、私はこのように言う――

00　inkar kusu

「さあさあ、

p. 1

【原文翻刻】

kamui katkemat　s　inennepo　i　ewa　tumas　nu　nankorna　tans　u　yankewa　eimek yan[10]　erusui anna ari　takan awa　kamui　utara　omatpawa　s　ine ikinne　oros　u orun　s　iktokoko　nea pon　menoko　neyakka　s　ino iyoyamokte　oros　u　ko　inrewewe[107]

【現代表記・日本語訳】

101　kamuy katkemat sinen ne po e=ipe wa e=tumasnu nankor na[108].

カムイなる淑女よ、一人だけあなたは食事をし、元気になっているでしょう。

---

[10]　okus「【動１】１．ひっくり返る、２．泡が煮え立つ」【奥田語彙】p. 9。

ここは、pop と piri　okus の 2 つの動詞句が接続助詞なしに繋がれているのではなく、動詞が名詞を修飾した名詞句 pop piri が、 okus の主語になっているのだと考えられる。

[105] 2 行前の半分が赤く半分が白い穀物一粒が、そこから増えて溢れるばかりの飯となって炊きあがったことになる。その後も、よそってもよそっても増えていくので、増殖するのは一回だけではないようである。

[10]　右側に「お前盛（？）リナサイ（ヰル人へ)」との書き込みがある。

[107] n が u と紛らわしい書き方になっているが、おそらく金田一京助の手と思われるかたちで、文字上部に「ン」と書き込みがある。

右側に「重イカラ モチアゲルニ（？） モモマガッタヤウニナル　脚マガル」との書き込みがある。

[108] 上のオオカミの兄弟らが心で思っていた事柄を、言葉としてそのままなぞった表現になっている。これも雪狐（オコジョ）のカムイがふざけている一環であろうか。

102　tan su yanke wa eimek yan. iperusuy=an na
この鍋を引き上げて食べ物を配ってくださいな。私も腹が減りました」
10　ari itak=an awa kamuy utar[109]　omatpa wa
と私が言ったところ、カムイたちは呆然として
10　sine ikir　ne poro su or un siktokoko.
揃って大鍋のところを、目をむき出しにして見つめている。
105　nea pon menoko ne yakka sino ioyamokte poro su ko　inrewewe[110]　ine yanke
その少女もとても不思議がり、大きな鍋を脚を曲げながら引き上げ、

p. 2

【原文翻刻】

ine yanke　uta a　ukwa　pirika　mes i　s ues ik ruwe　nukar　iki　s ino　omatu　neyakka ki yaiko　untek　san　a otta　mina kane　kamui utara　ene　ene tures i　koirus ka　umi　okay a koroka　oronno　ep anruwe　nukarpa awa　nea irus ka

【現代表記・日本語訳】

201　puta　a uk wa pirka mesi su esik ruwe[111]　nukar　iki
その蓋を取って美味しい飯が一杯になっているのを見ると
202　sino　omatu ne yakka ki[112]　yaykopuntek san　a or　ta mina kane
［その少女は］とても驚いたりもし、喜び、口元に笑みをたたえて
20　kamuy utar　ene ene turesi koiruska　umi okay a korka
カムイたちもこのように妹に対して腹を立てている感じがあったのだが、

---

109 これはオオカミの兄弟二人のことを指しているようだ。

110 参考例――tane　i ko　tan　oro s　u　ako　inrewewe　rorunso ne　ayankekar「もう煮えると　この大鍋　我脚を曲げて　横座へ　我揚げる」【ユーカラ集　】p. 7 。

111 ここは見ているのであるが、視覚情報を示す siri ではなく確証を示す ruwe が用いられている。実際に事実としてそうであることを強調するためだろうか。　行下も同様。

112 この ne yakka ki は並列で用いられることが多く、sino a=e　omatu ne yakka ki a=enupetne ne yakka ki「(訳を補うこと)」【ウエクル】p.2　という例が見えるが、必ずしも二つに ne yakka ki をつけないといけないこともないようで sino sino　yayekatuwen=an　sino iruska=an　ne yakka ki「全くもって　我は恥をきもし　怒りも　する」【ユーカラシリーズ　2】 91 - 917 行目という例も見え、ここでは並列の 2 つ目の要素の後にだけつけられている。本テクストにおいては、 omatu と yaykopuntek が並列になっているのではないかと推察されるが、yaykopuntek から関連表現である san　a or　ta mina kane へすぐに進んでしまったので、後ろに ne yakka ki をつけないまま表現が「流れて」しまったのだろうか。

20　poronno aep an ruwe nukar pa[11]　awa
たくさんの食べ物があるのを見たところ、

p.
【原文翻刻】
neyakka　oirapawa　ramu　emesusupa[11]　s ino nupetne　nkarkikane　raisona i　ko uni ruisona i[115]　yuputari　ko umpa　kamui　utara　kkeunos ki　komkosampa　tuwan onkami　rewan onkami　ukakus te　okai neyakka　ko onkamipa　e i akoonkami　orowano　kamui
【現代表記・日本語訳】
01　nea iruska ne yakka oyra pa wa ramu emesusu[11]　pa sino nupetne inkar ki kane
その怒りも忘れて、心が安らかになり、たいへん喜び眺めていると、
02　raysonapi i=kopuni raysonapi yuputari kopunpa
［少女は］高盛の飯を私に差し出し、高盛の飯を兄たちに差し出し、
0　kamuy utar ikkew noski komkosanpa
カムイたちは腰の真ん中を折りかがめて、
0　tu wan onkami re wan onkami ukakuste.
二十の拝礼（オンカミ)、三十の拝礼［＝たくさんの拝礼］を互いに重ねる。
05　aokay ne yakka i=koonkami pa a=epi a=koonkami.
私も［カムイたちが］私に拝礼をし、食べ物に私は拝礼をする。

p.
【原文翻刻】
utara　tane kes　to　somoi　ep ne　kusu　pirika　mes i　o apse[117]　e　iu　nea ponmenoko　neyakka

---

[11]　ここの他動詞 nukar につく複数の助動詞 pa も、行為の対象の複数ではなく行為主の複数（兄弟二人であること）を受けて用いられているようである。たくさんある食物を幾つも幾つも見ているという解釈が成り立つかもしれないが、すぐ上で妹一人で nukar が用いられている場合には助動詞 pa を伴っていない。2 行下の oyra pa の場合は確実に、その行為の主語の複数を示しているようである。
[11]　右側に「マルデ心ガ rikin スルヤウニ　ユカイニ思フ 安心シ喜（？）ブ」との書き込みがある。
[115] raisona i ではないかと思われるが、筆跡上は ruisona i のように見える。
[11]　ramu emesusu「満足する」【萱野辞典】p.　。tane sonno　ramu emesusu-　an ruwe-ne「今本当に心もやすらかなに　私はあるのだ」【ユーカラ集　】p.1 7。ただし、【久保寺辞典稿】p.70 および【人間篇】p. 1　には e ramupo emesusu という形が記録されている。
[117] 右側に「アアオイシイ ㄱオイシイ ㄱトイッテタベル　感謝スル オガルト同義」との書き込みがある。

sui i ea i ea emina rusui kane e iutari neyakka i erusui nankorna otuipakarwa ereyan ari takan iki ine apkusu kamui utara enupetne wa

【現代表記・日本語訳】

01 orowano kamuy utar tane kes to[118] somo ipe p ne kusu

それからカムイたちは、もう何日も食事をしていないものだから

02 pirka mesi o apsee iw.

美味しい飯をうまいうまいと嘆賞する。

0 nea pon menoko ne yakka suy ipe a ipe a. a=emina rusuy kane

その少女もまた食べに食べる。私は可笑しく思いながら

0 e i=utari[119] ne yakka iperusuy nankor na. otuypakar[120] wa ipere yan

「あなたがたの仲間たちも腹が減っているでしょうから、呼んで食べさせておあげなさい」

05 ari itak=an iki ineapkusu kamuy utar enupetne wa iki i ya

と私が言うと、何とまあカムイたちはそのことを喜んでそうすることだろうか、

p. 5

【原文翻刻】

ki iya ramno[121] rino koonkami pon menoko soinewa otuipa utari tanekuran kamui koinkarwa[122] eps ires ikna[12] rkiwa eyan ari tak awa orowano rukaineko aotta kamui utar sattek s iri okkai ene menoko utar ene nimara a[12]

【現代表記・日本語訳】

501 ramno rino i=koonkami.

低く高く私に拝礼（オンカミ）をする。

502 pon menoko soyne wa otuypa.

---

118 ここは「毎日」というよりは「連日」に近い。【萱野辞典】p.225 が kestokesto の項で「毎日毎日」に加えて「連日」という意味を記述しているが、ここの繰り返しがない用法でも同様の意味になっているようだ。

119 ここでの utari というのは、人間の世界のこの場所にいる他のカムイたちを指すのであって、人間の村の村人たちではない（人間たちには後から獲物を与えている）。カムイたちが人間の村人たちと同じように集まってきて、村人たちと同じような振る舞いを見せる。

120 他動詞 otuyekar「～を呼ぶ」の複数形で otuypakar となっている。ここは、呼ぶ対象が複数であることを示していそうだ。

121 右側に「タカク　ヒクク」との書き込みがある。

122 右側に「メグンデ」との書き込みがある。

12 右側に「イッパイ タクサン」との書き込みがある。

12 右側に「半分」との書き込みがある。

少女は外に出て［カムイの村人たちを］呼ぶ。

50　a=utari tanekuran kamuy i=koinkar wa aep siresik na.

「同胞たちよ、今晩はカムイが私たちを目をかけてくれて、食べ物が一杯あるのですよ。

50　arki wa ipe yan

来て食べてくださいな」

505　ari itak awa orowano irukay ne ko apa or ta kamuy utar sattek siri

と言ったところ、それから少しすると、戸口のところにカムイたちが痩せている様子が

50　okkay ene menoko utar ene

男も、女たちも、

p.

【原文翻刻】

pkas nimara reyekane mosem orowano un a a orpakno ieutomkotpakane[125] nneto a a rkiwa orowano itanki ari o ike ari koi umpako[12] yeyeramis kare aknos ino nupetnepa pkas eas kai e eorowa pkas - eaikap e utar e i i rura am a[127]

【現代表記・日本語訳】

01　nimara a apkas nimara reye kane[128]

その半数は歩き、半数は這って

02　mosem oro wano a un apa or pakno ieutomkotpa[129] kane

物置きのところから入り、戸口のところまでひしめき合い

0　inne topa a arki wa

大勢がやって来て

0　orowano itanki ari o ike ari a=koipunpa ko

それから碗で盆で我々が［食べ物を］差し出すと

05　yayeramiskare pakno sino nupetne pa.

---

125 utomkot に下線が引かれ、右側に「アトツギツギ　ツナガサッテ来」の書き込みがある。

12 右側に「気ヲ失フクライヨロコブ」との書き込みがある。

127 右側に「食物ハコブ」との書き込みがある。

128 飢饉でカムイたちも瀕死の状態にあるためにこのような表現が用いられるのであろう。【煙管が話す】p.11 には nimara a reye wa arki siri「残り半分は這いながら来る様子を」という類似の表現がある。

129 【人間篇】p. 28 に tu suy settok re suy settok utomkote「しゃくりあげ、しゃくりあげては泣いた」という表現があり、知里真志保は utomkote を「互いに連結させる」と解釈している。

我を忘れるほどにとても皆が喜ぶ。

0　apkas easkay pe ipe orowa apkas eaykap pe utar epi irura=an pa[10]

歩ける者が食事をしてから、歩けない者に食事を運び、

p. 7

【原文翻刻】

ne ittano s ine s uomap innekunip e yakka[11] rura yakka orun poo s i us ke[12] kamui utara sino yokunurpawa eutur eka neyakka s inri i unarpa yakka eram eutek tane eken nisat kunne nisat okutekari[1] kamui utara as iren wa[1]

【現代表記・日本語訳】

701　anepittano[15] sine su oma p inne kuni p[1] e yakka rura yakka

夜通し一つの鍋に入っているものを、大勢の人が食べても、運んでいっても、

702　or un poo sipuske[17].

中身は一層増えていく。

70　kamuy utar[18] sino iyokunure pa wa

カムイたちはたいへん驚いて

70　ipe utur peka ne yakka a=sinri i unarpa[19] yakka erampewtek.

---

[10] この部分は apkas eaykap pe utar「歩けない者たち」の epi i「食事」を［歩ける者たちが］rura「運ぶ」という関係になっていると思われるが、これに自動詞につく　人称の人称接辞がついており、どこからどこまでを動詞ととるべきなのかが、よく分からない。apkas-eaykap-pe-utar-epi irura=an とするべきだろうか。

[11] 右側に「食ッテモ運ンデモ」の書き込みがある。

[12] 右側に「嵩フエル」の書き込みがある。

[1] 右側に「ヨアケチカクナル」の書き込みがある。

[1] 右側に「サソウ」の書き込みがある。

[15] ne ittano「夜いっぱい　an は an　ikara「夜」の意」【ユーカラ集 6 】p.215。

[1] この inne kuni p という表現は金成マツが比較的頻繁に用いているが、他の地域には用例が見当たらず、また知里幸恵の記録にも見つからないようだ。

[17] sipuske は辞書類をみると、穀物が水を吸って、炊きあがって「ふくれる」ことを示すために使われることが多いようだが、ここでは既に炊き上がっている飯がどんどん増えていくことを表現しているようだ。

[18] ここの kamuy utar はオオカミのカムイの兄弟のことを指しているのか、飯を食わせるために呼び寄せた他のカムイも含めて指しているのか、判別がつきづらい。どちらかと言えば前者であろうか。

[19] unarpa は他動詞　unara の複数形であるが、目的語の a=sinri i は一つしかないと考えられるの

食事の合間にも私の素性を探ろうとするが、できない。

705　tane peker　nisat kunne nisat okutekari. kamuy utar[10]　a=siren wa

今や東雲の朝と闇の暁が行き違って明け放たる。カムイたちを私は誘って

p. 8

【原文翻刻】

imta paye an wa　nkaranko　sonnokaun　pkato a　s innaikane　momam e to a　s innaikane s irmoyoikekane[11]　ukata terke　s irki　iki　tanne s itu[12]　etu uta　s ankane　kamui[1]　utar o erai wano[1]　yukto a a　ekota[15]　okeu a kunine[1]　ye orowano　toop okimun　wano inne　pkato a a　momam e

【現代表記・日本語訳】

801　kim ta paye=an wa inkar=an ko

山へと行って見てみると、

802　sonno ka un apka topa sinnay kane momanpe topa sinnay kane

本当に牡鹿の群れが一方に、牝鹿の群れがもう一方に

80　sirmoyoyke[17]　kane ukatateke.

ひしめきあって、踏み合い押し合いする。

80　sirki　iki tanne situ etu　u ta as=an kane

そうすると長い尾根の先端に私は立って、

805　kamuy utar　operay wano yuk topa　a i=　ekota okewpa kuni ne a=ye[18].

で、主語の複数か、または「探す」という行為を何度もしていることになるだろうか。

[10] ここの kamuy utar は、後ろの狩りの場面の展開からして、オオカミのカムイの兄弟のことを指しているようである。

[11] 右側に「カゾヘレナイクライノヲ moyoike　イッパイ　蛆タカルヤウニ　別々ニイッパイアツマル」の書き込みがある。

[12] 右側に「長イ山根ノサキニ　コノ我立ツ」の書き込みがある。

[1]　右側に「ホロケウドモ」の書き込みがある。

[1]　右側に「上ノ方カラ」の書き込みがある。

[15] 右側に「私ノ方へ」の書き込みがある。

[1]　右側に「追フ」の書き込みがある。

[17] moyoyke「うごめく」で【萱野辞典】p.　に記載があり、また【ユーカラシリーズ　7】p.7　には　ep ne kuni p　moyoyke　kane「それらの魚群が　ウヨウヨうごめく」、【ユーカラシリーズ 5 】p.10　には tan inne kuni p　ukatamoyoyke kane「非常に多くのものが、　上になり下になり動めいていた」との用例が見えるが、sirmoyoyke という語形の記録は管見の限り見当たらない。

[18] kuni はそのまま ye などの動詞につながることが多いとされ（【千歳辞典】p.1 5、【沙流辞典】

カムイたちが川上からシカの群れを私に向かって追い込むようにと言う。

80　oworano toop okimun wano inne apka topa a momanpe topa a

それから、［カムイたちが］はるか山の方から大勢の牡鹿の群れ、牝鹿の群れを

p. 9

【原文翻刻】

o a a s innaikane ekota okeu a yuk oyuppa umi uterkere umi orone am e tososatki[1 9] sas natara[150] sap umi s itturimimse kane sap pkato a kot aot kina osoinkar einkar s iki i kina etomne[151] e oyu u[152] tan nitne kamui rarakusu

【現代表記・日本語訳】

901　sinnay kane[15] i= ekota okewpa.

それぞれ別々に私に向かって追い込んでくる。

902　yuk oyuppa umi uterkere umi oroneanpe[15] tososatki sasnatara

鹿が走る音、一斉に跳ね回る音が、一緒になってザアザアとざわめきわたり、

90　sap umi sitturimimse kane sap.

山を下る音が地に響き渡りながら山を下る。

90　apka topa kot aot inaposoinkar einkar siki i kinapetomne e oyupu[155].

牡鹿の群れの前で、キナポソインカラが、その見る目が草色をしてそこを駆けている。

---

p. 0)、金成マツの筆録の記録においてもそのような例は見つかるが（【六人の山子】p.29、【金の煙草入れ】p.298)、ここでのように kuni ne の後に ye が来るのは比較的珍しいようだ。この場合には ye の目的語が何になるのであろうか。

[1 9] 右側に「ドンドンドンドン」の書き込みがある。

[150] 右側に「シャシャシャシャ」の書き込みがある。

[151] 右側に「ツユノイロ」の書き込みがある。

[152] 右側に「ハセル　（外ノ人ニハミエナイ狼藉ダモノ)」の書き込みがある。

[15] 上には apka topa sinnay kane momanpe topa sinnay kane「牡鹿の群れが一方に、牝鹿の群れがもう一方に」と、別々であるものそれぞれに sinnay kane がついていたが、ここでは二つを列挙した後に一回だけ sinnay kane が用いられている。例えば【ユーカラ集 1】p.257 には、kamuy kuma tay yuk kuma tay ep kuma tay sinnay kane「熊の肉乾し棚　鹿の肉乾し棚　魚の肉乾し棚　別々にあって」という例が見えるので、このように要素を列挙した後で最後に sinnay kane と言う形式も十分に確立しているようだ。

[15] oroneanpe「「一緒になる」「相和する」と訳し得べし」【久保寺辞典稿】p.22 。

[155] e oyupu という語形を用いているので目的語は場所なのではないかとも考えうるが、ここでは前に kot aot という位置名詞 kot a が元にはなっているが全体として副詞としてはたらいていそうな単語が用いられている。

905　tan nitne kamuy irara kusu

この魔物のカムイが悪戯をして

p. 0

【原文翻刻】

ene yuk　ikoikip　ronnu　eaikap i　eraman　oya ponku　oya pon　i　otuunu　kina　oso inkar　tokse s　iki　i　toiko　ot　a　i　ir　one[15]　okus　koeramno　inne yukto　a　a[157] wens　ir[158]　or　ok un　kutika[159]　o　ittano[10]　raiwa　oronu　uri　neino rai　yuk ikiri　i an oro　et

【現代表記・日本語訳】

001　ene yuk　ikoykip a=ronnu eaykap　i a=eraman.

このように鹿の獲物を殺すことができなかったことを私は見てとる。

002　noya pon ku noya pon ay a=otuunu　inaposoinkar tokse siki　i a=toyko　ot　a.

ヨモギの小弓にヨモギの小矢を私はつがえ、キナポソインカラの脈打つ目を激しく射る。

00　pi　ir pone[11]　okus koeramno

その骨がボロボロになって倒れ、それとともに

00　inne yuk topa　a wensir　orpok un ekutika[12]　opittano ray wa

大勢の鹿の群れが高い恐ろしい山の下へとそこを超えて皆落ちて死んで、

005　poro nupuri neno ray yuk ikiri　i an.

大きな山のように死んだ鹿が積み上がっている。

p. 1

【原文翻刻】

15　右側に「蛆ニアリ　コマイ目ニミエナイ蛆ノ卵　細イコマイモノニ骨融ケル　（骨ナクナッタ）　ソレト同ジク」との書き込みがある。

157　この単語の真下、wens　ir の右上に「山（アブナイ）」との書き込みがある。

158　右側に「高イ　オソロシイ nupuri ノ下」との書き込みがある。

159　右側に「ソコカラ　超エテオチル」との書き込みがある。

10　最初　ittano と書いて、後から　を消して o を書き加えた跡がある

11　pi　iri pone　e　orao　iwe「全身ぼろぼろ虫が湧いた様になつて 落ちころげた」【久保寺辞典稿】p.2 5。原ノートの書き込み（上述の注）も参照。知里幸恵の記録した類話である「飢饉を司る神の話」【知里幸恵ウエペケレ】では　waposoinkar pi　ir pone　i　okuspare という表現がある（p.82）。金成マツは、【虎杖丸別伝】では pi　ir pone　orawo　iwe（2298 行目など）または pi　ir pone　e　orawo　iwpa（2 99 行目）という表現を用いている。

12　語義不詳。ノートへの書き込み内容に従う。

sanrukonna maknatara nkaranko kamui ep utara kannaru i s ikus ire oknaru i otas iru semkora i ep ats iri anko epruppata e osoinkara einkar s iki tokikus is [1] e oyu u oya ponku oya pon i otuunu s irko ot a i ir one okus eruram ari

【現代表記・日本語訳】

101 poro pet san ru konna maknatara.

［また］大きな川が下ってくるのがさやかに見える。

102 inkar=an ko kamuy ep utar kanna rupi sikus ire[1] pokna rupi ota siru semkora i

私は見ると、鮭たちが上の群れは日に焼け、下の群れは砂をこするように

10 ep at siri an ko ep rup pa ta peposoinkar einkar siki tokikusis[1 5] e oyupu[1] .

魚が群れる様子で、魚の群れの上にペポソインカラが、その目が外へ飛び出し駆けている。

10 noya pon ku noya pon ay a=otuunu a=sirko ot a.

ヨモギの小さな弓と小さな矢を私はつがえ、激しく射る。

105 pi ir pone okus. eru ram ari

その骨がボロボロになって倒れる。ただ念力だけで

p. 2

【原文翻刻】

nne eprup[1 7] et arur eyapte neita akno pirika ep kiri an taporowano s itu etuta ka attoi u s ikakus te s iki atek aro atek etukkane nan awa orkeu okkayo utar

---

[1] 右側に「目玉トビデルヨーニナッテル」との書き込みがある。

[1] 厳密には「上の群れを日の光が焼く」となるか。【ユーカラ集】では sukus ire s ikus ire という形が用いられているのが見える【ユーカラ集 2】p.152。

[1 5] tokikusis「高く突き出る、飛びだす」【久保寺辞典稿】p. 29。知里真志保はこれを「目を剥く［びっくりして］」と解釈している【人間篇】pp. 15- 。

[1] この e oyupu も上と同様に場所を目的語にとりそうだが、前を見ると ep rup pa ta と位置名詞 pa の後ろに格助詞が用いられたうえで、後ろで e oyupu が用いられている。

なお、知里幸恵の記録した「飢饉を司る神の話」においては、この箇所が inkar=an ko topa atpake eposoinkar e oyupu topa atkese waposoinkar e oyupu「見ると、その群れの一端にペポソインカラがついていて、もういったんにイワポソインカラがついています」【知里幸恵ウウェペケレ】p.82 となっており、ここでは両方の魔物が鹿の群れの前後にいるのだが、e oyupu が atpake と atkese という位置名詞を受けて用いられている。

[1 7] 右側に「思ヒデ川ブチヘサカナ ヨリアガルヨーニスル」との書き込みがある。

tuima[18] as enekusu ese aukan iunatara[19] tap ituisamta uterkere nea yukto a eteun[170] okeu a wa[171]

【現代表記・日本語訳】

201 inne ep ruppet parur a=eyapte ney ta pakno pirka ep ikiri an.

大勢の魚の群れを川岸へと私は揚げ、どこまでも美しい魚の列ができる。

202 tap orowano situ etu ta[172] kapar toypu a=sikakuste

さてそうして、尾根の突き出た所で、薄い土くれを私は自分の上にかぶせ、

20 a=siki patek a=paro patek etuk kane an=an awa

目ばかり口ばかりが突き出るようにしていたところ、

20 orkew okkayo utar tuyma pas pe ne kusu ese aw kan piwnatara

オオカミの男たちが遠く駆けてきたものだから、息をつく音が荒い。

205 tap i=tuysam ta uterkere

「このように、我々のそばをいっせいに跳ね回る

20 nea yuk topa eteun a=okewpa wa

そのシカの群れをこちらへと我々は追い込んで、

p.

【原文翻刻】

tapruye e[17] ininanina[17] kane s iranko s inepka isam nekona s iran ruwe taan ari aweokai koro kut or okun e ei a awa rai yuk oro ikiri nukarpa s ino omatpa nani et orun osarpa rai ep ikiri nukar a wa tunnewa oa untaipa[175] ine onkami a onkami a sonno etapne okai utarka kamui ne awa

【現代表記・日本語訳】

01 tap ruye e ininanina kane siran ko sine p ka isam.

---

[18] 右側に「遠クカラ走リテ来タモノ（「ン」か？）ダカラ」との書き込みがある。

[19] un の上に「ウナ」との書き込みがある。金成マツによる u と n の書き方は、両者を判別しづらいことがあり、そのためであろう。また、右側に「ハハ」との書き込みがある。息の音を表しているか。

[170] この単語の下に「コチノ方へ」との書き込みがある。

[171] 右側に「追ッタッケ」との書き込みがある。

[172] 原ノート p. 8 の類似の表現とそこでの原ノートへの書き込みを参照。

[17] 右側に、一文字消した跡と、それに続いて「アシアト」との書き込みがある。

[17] 右側に「ニナニナトハツブシ抑（？）シタ　ヨー」との書き込みがある。

[175] 右側に「タッテタモノ ドサット尻モチツク」との書き込みがある。

このようにその足跡がビッシリとついている様子なのに、一頭もいない。

02　nekona siran ruwe ta an[17]

いったいどうしたことなのだろうか」

0　ari　aweokay kor kut　orpok un　e　eypa awa

と言いながら、断崖の下へと覗いてみたところ、

0　ray yuk poro ikiri nukar pa sino　omatpa.

死んだ鹿のたくさん積まれているのを見て、たいへん驚く。

05　nani pet or un　osarpa ray　ep ikiri nukar pa wa

すぐに川の方へと向きを変え、死んだ魚の群れを見て

0　tun ne wa oa　untaypa[177]　ine onkami a onkami a.

二人で腰を抜かして何度も拝礼を繰り返す。

07　sonno　e tapne aokay utar ka kamuy a=ne awa

「なんとまあ私たちもカムイでありましたが、

p.

【原文翻刻】

newa ek　kamui　tapne　nu　urkasure wa　otusui anta　oresui anta　kao　iuki s　iri　ene an ita an tane anakne　inu kotan　e　uni eas　kai　kamui　ene o　ittano　nauuk　eas　kai kus　ki ari uwenu　etne　oro　pka　ri　ine rupne[178]　niyes　ike　karwa　se　ine　sap　iki sui　poniramokka[179]　kikusu

【現代表記・日本語訳】

01　ne wa ek kamuy tapne i=nupurkasure[180]　wa

17　金成マツのアイヌ語には、ここにあるように疑問文の文末句として ruwe ta an という形式が存在するが（ただし知里幸恵に用例は見つからない）、その前の動詞が siran となっている例は他に用例が見えない。

177　oa　untaypa「腰を抜かす」【久保寺辞典稿】p.212（単数形は oa　untaye で同じページに記録されている）。

178　右側に「皮（？）ハグ　iri-an」との書き込みがある。

179　右側に「又イタヅラ」との書き込みがある。

180　nupurkasure「わけがわからなくさせる」【沙流辞典】p.　5。【ユーカラ集】では　inupurkasure ekarkar という語形が頻出し、　inu　urkasure　aiyekarkar kusu「威力にすぐれられ　たものだから」【ユーカラ集 1】p.　20、　inupurkasure　iyekarkar「巫道の力で　われを負かし」【ユーカラ集　】p.289 などの訳があてられている。ここは、どうも【ユーカラ集】と近い文脈で用いられているようで、これらの訳に近い訳を採用している。

なお、【ユーカラ集】には　inupurkasure の用例しか見えず、i=nupurkasure という形は鍋沢元蔵氏の

どこから来たカムイだかがこのように私たちを巫力で上回り、

02　otu suy an ta ore suy an ta[181] i=ka opiwki siri ene an　 i ta an.

二度も三度も私たちはこのように助けられています。

0　tane anakne aynu kotan　epuni easkay

今や人間の村が繁栄することができ、

0　kamuy　ene opittano inaw uk easkay kuski[182]

カムイも皆がイナウを受け取ることができるでしょう」

05　ari uenupetne poro apka ri　ine

と皆で喜び、大きな牡鹿を皮剝ぎして、

0　rupne niesike kar wa se　ine sap　iki

大きな背負い荷にして山を下りると

07　suy pon iramokka a=ki kusu

また小さないたずらを私はしようと、

p. 5

【原文翻刻】

otoi　oso antek　 orkeu kamui[18]　 akno s　itoma　eramu kittararkep[18]　 isam　e　muntumum　e[185]　nei aeraman　e[18]　 newa kusu　rupne s　ike ki wa　koakturirikane[187]　uos　i ukoitak　nekona sap　anko　 tures　ipo　 ene autari　nu　etnes　iri　okaiya　ari　 awe okai　neetokota　rutomotuye　s　i　ipni[188]　tumam　 akno　m　e　 newa s　ituri

【現代表記・日本語訳】

テキストには記録が見えるが、金成マツ氏のテキストで記録が見つかるのはおそらく初めてのことである。

[181] otusui an ta　oresui an ta「二度も　三度も」【ユーカラ集 7】p.18 。

[182]　us　ki「為サントス　成ラントス. part.　 out to　e or　o」【バチラー辞典】p.28 。例としては esermaka　aus　kus　ki na　e=sermaka　a=us kuski na 「お身のうしろに　わたしはついていてやる」【ユーカラ集 2】p.1 5。

[18]　右側に「狼神（？）一バンオッカナイモノ」との書き込みがある。

[18]　右側に「キビワルイ　モノ私オボエテル」との書き込みがある。

[185] 右側に「ヘビノ ㄱ」との書き込みがある（「ㄱ」は「事」の略字)。

[18]　先に「araman　e」と書いて、後から上に e が付け足されている。

[187] 右側に「ニモツオモイカラ首ノバシテ　セオフ」との書き込みがある。

[188] 右側に「舟木ノヤウナモノニナッテ」との書き込みがある。行を変えて下にもう一文字あるのだが、これが判読できない。

501　otoyposo=an[189]　tek

私は地中をくぐって、

502　orkew kamuy pakno sitoma eramukittararke p isam pe

オオカミのカムイがそれほどまでに恐れ、気味悪がるものがないものが

50　muntumunpe[190]　ne　i a=eraman pe ne wa kusu

蛇であることを私は分かっているものだから、

50　rupne sike ki wa kookturiri[191]　kane

［オオカミの兄弟が］大きな背負い荷を作って、首筋を前方に伸ばして［背負って］、

505　uosi ukoytak

相前後して言葉を交わし、

50　nekona sap=an ko a=turesipo　ene a=utari nupetne siri okay ya

「どんなに、私たちが山を下ったら、我々の小さな妹やら村人たちが喜ぶだろうか」

507　ari　aweokay. ne etoko ta

と言う。その［オオカミの兄弟の］前に、

508　ru tomotuye si　ipni tumam pakno an pe a=ne wa

道を横切る大舟木の幹ほどもあるもの［大蛇］に私はなって、

p.

【原文翻刻】

nkane　nan awa　s　ine ikinne　kos　ikraipap[192]　sonno ramos　i wano　omatpapne kusu　tap ainu　ne　kane　okairok　e　s　i　orkeu　tup　is　s　ike　e　tuima　osur　awa　sonnosonno or　ererke　oro[19]　awe　e[19]　nu　uri　ene　kenas　sikas　i　eiyonim　a[195]　uterkere　mas　kino

---

[189] otoyposo「地中をくぐる、地をくぐる」【久保寺辞典稿】p.2　0。

[190] muntumunpe「名寄　へび」【方言辞典】p.190。管見の限りでは、金成マツの筆録テクストで他にこの単語の用例は見つかっていない。

[191]　o-ok-turiri「首筋ヲ前方ニ述ベル（重キモノヲ負ヒシ時ノ如ク）　.i.　o stret　t　e ne　k　orwar　as t　ou　arryin　a　ea　y　ur　en」【バチラー辞典】p.2　。この場合は実際に重い荷物を背負っている。

[192] ノートの右側に「私ヲミタ」との書き込みがある。

[19]　最初に or　erere　oro と書かれ、後から挿入記号と共に k が単語上部に書き加えられている。ノートの右側に「大キナ声　ホントニ今ホントノ狼ニ　ナッタカラ　今マデ人間ノ形ヲシテタノニ　アンマリ　ビックリシタカラ」との書き込みがある。

[19]　冒頭の　a の後ろに何か文字が書かれ、それが消されて、w からあらためて書き直されている。

[195] ノートの右側に「声　木魂スル　eyonim　a　木ダマ」との書き込みがある。

omatpakasui e nep ne kusu o iupa ekoo i opkeopke[19] oro o ata i[197] kikoro uterkere

【現代表記・日本語訳】

01 situri=an kane an=an awa sine ikir ne i=kosikraypa p

体を伸ばしていたところ、揃って私の方に目をやったが、

02 sonno ramosi wano omatpa p ne kusu

本当に心の底から驚くものだから

0 tap aynu ne kane okay rok pe

このように人間であったものが、

0 si orkew tuppis[198] sike e tuyma osurpa wa[199]

大オオカミ二匹が自分たちの背負い荷を遠く投げ出して、

05 sonno sonno orperere[200] poro awe e

本当に本当にウオーとうなり声をあげる大きな声が

0 nupuri ene kenasi kasi eiyoninpa[201]

山や木原の上にこだまし、

07 uterkere maskino omatpa kasuy pe ne p ne kusu

［オオカミ二匹が］揃って駆け、あまりにも驚きすぎるものだから、

08 opiwpa ekoopi opkeopke poro opata i[202] ki kor uterkere yakka

大急ぎで走り、別々の方向へ何度も屁をこき、盛大な下痢をしつつ一斉に駆けるが、

p. 7

【原文翻刻】

---

19 ノートの右側に「オナラ」との書き込みがある。

197 ノートの右側に「バッタリ一人クソスル　（キタナイ）」との書き込みがある。

198 tuppis = tup「二つ」（【ユーカラ集 2】p.128）

199 ここでは、蛇（大蛇）を見てビックリしたために、オオカミのカムイが人間の姿から動物としてのオオカミの姿になってしまった、という興味深い叙述がある。この物語は人間の世界で進行しているため、何か人間の世界でオオカミが人間の姿で生活しているのは常態ではなく、何か驚くような事態が起きると動物としての姿に戻ってしまうということであろうか。

200 原ノートでは or ererke と修正されているのは、pererke「裂ける」が想定されていたのではないかと思われる。しかし、orperere で「ウォーとうなり声をあげる」という意味で沙流（【沙流辞典】p. 8 ）や十勝（【吉田語彙】p. 2）で記録があり、金成マツによる筆録でも【鹿の腹のなかで赤ん坊が泣く】p.1 1 に orperere の用例が見つかるため、これは修正前の語形のままで良いのではないだろうか。

201 iyoinim a「反響ス．.i. o e o. o resoun . o a e a noise in t e ea 」【バチェラー辞典】p.109。

202 【民譚集】pp.18-9 に poro opata i s i nupuri「大きな下痢糞の山」という表現がある。

yakka umnanta[20] atek okaikane ukomatmatke[20] otoi osoantek unita ek an orowano mina an a mina an a ine a oni i neyakka rka akno emina nerok kamui yais ikarunko[205] nea s itomapka sam s ino yaikeu umsupa kor sapwa eas ka uwe nupetne tap orowa uras et unkuru[20] tapne tapne

【現代表記・日本語訳】

701 umnanta[207] patek okay kane ukomatmatke[208].

同じ場所にばかりいたままで足を上げて跳ねている。

702 otoyposo=an tek a=uni ta ek=an orowano

私は地中をさっとくぐって、自分の家に戻って来て、それから

70 mina=an a mina=an a ayne a= oni i ne yakka arka pakno a=emina.

笑いに笑ったあげくに、私のお腹も痛くなるまでそのことを笑う。

70 nerok kamuy yaysikarun ko nea sitoma p ka isam.

そのカムイたちが意識を取り戻すと、その恐ろしいもの［大蛇］もいない。

705 sino yaykew umsu pa kor sap wa easka uenupetne.

たいへんな災難に遭いながら山を下りて、初めて互いに喜び合う。

70 tap orowa Uraspetunkur[209]

さてそうして、ウラシペッ人に

p. 8

【原文翻刻】

ukoeramunin kamui anewa inukotan e unire kusu wor otta yuk ene ep ene oronno ronnu wa okai i ewentarapka uras et unkuru nu etnewa ponno tumas nu utari i awetenke ine yukse ipse epse tane kotan e uni s ine antota[210] rorun uyarne kurunkane. s irki kusu nkaran awa oro tuki ikakas i moinatara kas iketa

---

20 ノートの右側に「同ジトコロニ」との書き込みがある。

20 ノートの右側に「足ヲアゲテ　ハネテル 一ツトコロニ」との書き込みがある。

205 ノートの右側に「気絶シ（？）タノデ（？）今目サメタトイフカラ」との書き込みがある。

20 ノートの右側に「コノ村ノ長ノ ヲ コノ　（末尾部分判読不能)」との書き込みがある。

207 umnanta「同所ニ. a . t one p a e y t e si e o . o et er.」【バチラー辞典】p.172。

208 matmatke という語は、同じ金成マツによる筆録で【カワウソ私に化ける 1】にも出てきており（2 02 行目)、そこでは matke を参考に「パッと立ち上がる」と訳している。

209 ここまではカムイ同士のやり取りが描かれていたのが、ここからが人間たちとのやり取りになる。

210 ノートの右側に「アルトキ第一ノマドニ影ミエタ　（杯デセウ)」との書き込みがある。

【現代表記・日本語訳】

801　tapne tapne a=ukoeramunin kamuy a=ne wa

〈これこのように人に気づかれないカムイで私はあって、

802　aynu kotan a= epunire kusu

人間の村を回復させるために

80　iwor or　ta yuk　ene　ep　ene

猟場で鹿やら鮭やらを

80　poronno a=ronnu wa okay　 i　a=ewentarapka.

たくさん私が殺してあるということ〉を私は夢に見せる。

805　Uraspetunkur nupetne wa ponno tumasnu utari i pawetenke　ine

ウラシペッ人は喜んで、少し元気のある村人たちに指図をして

80　yuk se　ep se tane kotan　epuni.

鹿を運び鮭を運び、今や村が回復する。

807　sine an to ta rorun puyar[211] ne kurun kane sirki kusu inkar=an awa

ある日、神窓に影が差す様子なので、そちらを見たところ、

808　poro tuki ikakasi moynatara[212] kasike ta

大きな杯が溢れるばかりになみなみとし、その上に

p. 9

【原文翻刻】

kikeus　asui　os i i ranke　sonkoye eneene　koyairaike an i　o ittano yea yea　nepka　eyayattasapka　sam ouse　inu tonoto ari　nau ari kamui　nomi ari an　sonkone s ino　yaiko untek an　oro tuki aukwa　koonkami　wan s intoko oro　ponnorankeo　tuki arura　orowano　uraikari　ene aiko itupap　tapne　nau　ne awa pirika　nau　oronno　up a a up a

【現代表記・日本語訳】

901　kikeuspasuy　osipi ranke[21]　sonkoye

削りかけのついた捧酒箸が行きつ戻りつして、使者として伝言を伝え、

---

[211] 金成マツや知里幸恵は「窓」に puray（ urai）という語形を使うため、ここでのように他の地域と共通の puyar（ uyar）という語形が用いられるのは【ユーカラシリーズ 1 】p. 2 や【ユーカラシリーズ 21】p.19 など数が限られているようだ。

[212] oro tuki　kani tuki　ika kas i　moinatara　sake o wa　ikoturiri「大きな盃 黄金の盃が あふれるほどに なみなみと 酒をみたして わたしにさしのべた」【ユーカラ集 1】p.110。

[21] os ipi ranke sonkoye　awe eneokai「行きつ戻りつ、使者としての口上を述べて云うには」【神謡集】p.118。

902　ene ene i=koyairayke=an　i opittano ye a ye a
かくかくしかじじか人々が私に感謝していることを全て言い言いし、
90　nep ka a=eyayattasa p ka isam[21]
「まったく我々は返礼のしようもなく（それほど感謝しており）
90　owse aynu tonoto ari inaw ari kamuy a=nomi
ひたすら人間の酒とイナウでカムイに我々は祈りを捧げております」
905　ari an sonko ne sino yaykopuntek=an
という伝言で、本当に私は嬉しくなる。
90　poro tuki a=uk wa a=koonkami
大きな盃を私は受け取ってオンカミ（拝礼）をし、
907　iwan sintoko oro ponno ranke ko[215]　tuki a=rura
六つの宝器（ほかい）に少し注ぐと、盃を私は運び、
908　orowano puray kari　ene a=ikoytupa[21]　p tapne inaw ne awa
それから窓を通して、このように私が欲しがっていたものがイナウであったところ、
909　pirka inaw poronno a　up a a　up a.
美しいイナウがたくさん入ってはまた入ってくる。

p.50

【原文翻刻】

tane sake pirika　utari a　awe　tenke inumpa an　kuetoko　oiki　nkaranko　orkeukamui　utara ramma　s　inri　i[217]　eram　etekpa wa　unarakor okai　nea pon menoko[218]　eyaikatai kar wa tas　um wa　otkewa　is　koran　nepkamuye　o　anakusu　[219]　ene inu　ur　kasurewa　usaine yaikatwente　ni ne yakka　katkarwa kusu　nenankoro　neino ikikamui

---

[21]　直前の行は間接話法で語られているので、主語が不定人称（「人々」）で、目的語が主人公の雪狐のカムイであると考えられるが、この行と次の行は ari で結ばれているので直接話法であると考えられ、主語はウラシペトゥンクルと彼が代表する人間たちであろう。

[215] 人間の世界から送られてくる酒をこのように少し注ぐだけで、カムイの世界ではたっぷりとした量の酒となる。

[21]　ikoytupa は自動詞で、他動詞になると eikoytupa になると考えうるが、ここでは金成マツは ikoytupa を他動詞だとして用いているようである。ただし、【鹿の妻】2701 行目では eikoytupa という語形が用いられている。

[217] ノートの右側に「私ヲ（？）ナニモノダカ」との書き込みがある。

[218] ノートの右側に「女子 私ニ　戀シタ」との書き込みがある。

[219] ノートの右側に「イカトシテ」との書き込みがある。

【現代表記・日本語訳】

5001　tane sake pirka a=utari[220] a=pawetenke inumpa=an.

今や酒が美味しくなり、私は村人たちに命令して酒漉しをする。

5002　iku etoko a=oyki inkar=an ko

酒宴の準備を私はし、ふと目をやると

500　orkew kamuy utar ramma a=sinri i erampetek pa wa unara kor okay.

オオカミのカムイたちがずっと私の素性が分からないで探し求めている。

500　nea pon menoko i=eyaykataykar[221] wa tasum wa otke wa is kor an.

その少女は私に恋をして、病気になって寝込んで泣いている。

5005　nep kamuye o ana kusu[222] ene i=nupurkasure[22] wa

〈何のカムイがよもやこのように我々を霊力で上回って

500　usayne yaykatwente[22] ani ne yakka i=katkar wa kusu ne nankor

いろいろな恥ずかしめであっても我々をだますからであろうか、

p.51

【原文翻刻】

nukar tukarita tan mos irkata somo itomnukaran riyainu wa otke wa okai i nukara[225] iki sonno emina rusui tapne tapne okai ene iki an i rketa irara an s inot an i ene kina oso inkar e osoinkar nnitne kamui kemram etayeko s ine kamuika nukar eaikap tam e kusu inu kotan naanika raius tekka[22] inu isam a

【現代表記・日本語訳】

5101　neno iki kamuy a=nukar tukari ta[227]

---

[220] ここの村人たちは、人間ではなくカムイの村の村人たちである。

[221] 【ユーカラ集】に用例が見つからないが、【ユーカラシリーズ】のなかに「片思いをする」と訳されている用例が複数ある。例として ene ene ieyaikataikar wa s ukup sam e ka yaikos itnerei ene o ittano ye utas a「かくかくしかじか　片思いをして　若い心臓を　悩ませたことでも　みんな代わる代わる言って」【ユーカラシリーズ　】pp.22 -5。

[222] o ana kusu「さしもの、流石の、時としては、まさか、よくもまあ、よもや」【久保寺辞典稿】p.21

[22] 01 行目の注釈を参照

[22] yaikatwente「恥ずかしめた」【ユーカラ集 1 】p. 19

[225] 最初に nukarar と書かれた後で、最後の r が斜線で消されている。

[22] ノートの右側に「スッカリ形（？）モ亡ク　所ダッタ」との書き込みがあり、「形」の下にさらに「ソ」ではないかと思われる文字が見える。

[227] nroun kamui kamui uitek e kamui akusa anukar tukarike ta rai ka akoyaikus 「西浜の神 神の召

このようなことをするカムイを見ないうちに

5102　tan mosir ka ta somo itomnukar=an

私はこの国のうえで［誰か他の人と］夫婦になることはしない〉

510　ari yaynu wa　otke wa okay　 i a=nukar　iki sonno a=eminarusuy.

と考えて横になっているのを私は見ると、本当に私は笑いたくなる。

510　 tapne tapne aokay ene iki=an　 i arke ta irara=an sinot=an　 i　ene

〈かくかくしかじかで私がしたことは、半分は悪戯をして遊んだことでも、

5105　 inaposoinkar　eposoinkar annitne kamuy kemram etaye ko

キナポソインカラやペポソインカラという全く悪いカムイが飢饉を引き寄せ

510　sine kamuy ka nukar eaykap.

誰一人としてカムイがそれを見ることができなかった。

5107　tanpe kusu aynu kotan naani ka a=rayustekka[228].

そのせいで人間の村がもう少しで消滅させられるところであった。

p.52

【原文翻刻】

yakun　inu mos　irkata　orarpa　s　inu　ur kamui　ene s　i　an　kamui　ene　nau uk eaikap　nomi eaikap　noine iramu　nkusu　kao　as　an wa　e　i otta omanan wa　os　kino　e　ikas　i　ao　iukii　o　ittano　nukane　ewentarapte　orota eas　iri　okai nei　eramokai　ine　s　ietu uina　s　i　ar uina　ukoiyokunure

【現代表記・日本語訳】

5201　aynu isam a yakun

人間がいなくなってしまったら

5202　aynu mosir ka ta　osarpa sinupur kamuy　ene sipan kamuy　ene

人間のくにの上に振り向く、えらいカムイでもえらくないカムイでも

520　inaw uk eaykap a=nomi eaykap noyne iramu=an kusu

イナウを受け取れず、祈られることができないだろうと私は考えるので、

520　ikaopas=an wa e　i=or　ta oman=an wa　oskino e　i=kasi a=opiwki[229]　 i

---

使 神の小者を 見るひとつ手前に 死ぬこともできず」(【ユーカラ集 1】p.1 7)； nroun kamui anukar tukariketa　rai ka arus　ka　aniukes 「西浜の神を わたしが今少しで見るところで 死んでしまうも癪で わたしはできません」【ユーカラ集 1】p.178。

[228] ustek「消える」と ustekka「消す」が元になり、接頭辞 ray-「ひどく、激しく」が付け加わったものだろうが、この rayustekka という語形は、管見のところ用例が他に見つからない。

[229] ここまでの主人公の雪狐のカムイがオオカミのカムイたちに夢で告げた内容は、 i で結ばれてい

私は助けにあなたたちのところに行って、まずはあなたたちを救ったのだ〉ということを

5205　opittano a=nu kane[20] a=ewentarapte.

すべて私は聞いて（聞かせて？）、夢を見させる。

520　oro ta easir aokay ne　i eramokay　ine

そこではじめて私であることを分かって

5207　sietuuyna siparuyna ukoiyokunure.

自分たちの鼻をおさえ、口をおさえて皆で驚く。

p.5

【原文翻刻】

muntumum e　newa[21]　omatpa wa　kokatuns iri[22]　s ino eyas toma　s iri aeram oken　omatpa yakka　somoka mas kino　ene kokatkoro　kuni aramui　nekusu　okai neyakka　omatu an　yakka ramma　aeminarusui　ekes ne　una unke an　orkeukamui　utar tures　turano　emem　tak o ittano　rki kamui　oronno uwekari

【現代表記・日本語訳】

5 01　muntumunpe a=ne wa　omatpa wa kokatun[2]　siri

蛇に私がなって［彼らが］それに驚愕する様子

5 02　sino eyastoma siri a=erampoken

そのことをとても恥ずかしく思っている様子を私は気の毒に思い、

5 0　omatpa yakka somo ka maskino ene katkor kuni a=ramu　i ne kusu

驚くにしても、まさかあまりにもこういう様子になるだろうとは思わないものだから

5 0　aokay ne yakka　omatu=an yakka ramma a=eminarusuy

るが、直接話法と同様に話し手の主人公が　人称で、言葉が向けられる相手のオオカミのカムイたちが 2 人称複数で示されている。

また、人間だけでなくカムイに対しても夢を見せて告げ知らせるという、興味深いコミュニケーション形態がここに見られる。

[20] 文脈からすると a=nure になりそうか。a=が不定人称である可能性もあるが、その場合、主人公の行為を示す用法と大変紛らわしい使い方がされていることになってしまう。

[21] ノートの右側に「蛇ニナッテ」との書き込みがある。

[22] ノートの右側に「アノザマシタ」との書き込みがある。

[2] 金成マツがこの単語を用いている例としては tap aki irenka　s ino rus ka　kotomno ek　kokatun　umi　okai na「このわれがした所業を　ひどく立腹している　らしくやって来た　様子で　あるよ」（【ユーカラ集 2】p.159）がある。韻文の場合は、このように kokatun が入ることで後ろの形式名詞と併せて 5 音節になり、1 行の音節がちょうど揃うという側面がありそうだ。ここは散文説話ではあるが、韻文的な言い回しが金成マツの念頭にあったのだろうか。

私もびっくりするけれど、ひたすら私は可笑しく思う。

5 05　ekesne una unke=an[2]　orkew kamuy utar tures turano emem a=tak

あちらこちらに私は招待をし、オオカミのカムイたちも妹ともに招待し、

5 0　opittano arki kamuy poronno uekari

皆がやって来て、カムイが大勢集まって

p.5

【原文翻刻】

kamui o ittano ramyepa koyairaikepa kes to iku an kamui utara inu inau nimara tup akore rep akore s inep akore s ino o ittano nupetnepa kamui o ittano koyairaikekoro wakpa okaketa orkeu kamui utar ae am wa[2 5] kes to uweneusar an[2] ine kottures i

【現代表記・日本語訳】

5 01　kamuy opittano i=ramye pa i=koyayrayke pa kesto iku=an

カムイがみな私を称賛し、私に感謝し、毎日私たちは酒を飲む。

5 02　kamuy utar aynu inaw nimara[2 7]

カムイたちに私は人間のイナウのうちからかなりの数を、

5 0　tup a=kore rep a=kore sinep a=kore sino opittano nupetne pa.

私は二つやり、三つやり、一つやり、本当に皆が喜ぶ。

5 0　kamuy opittano i=koyayrayke kor iwak pa okake ta

カムイたちが皆私に感謝しながら帰って行った後で

---

[2] この una unke という動詞は「招待する」という意味で、【沙流辞典】も【神謡集辞典】も招待する相手を目的語にとる他動詞／2 項動詞であるとしているが、ここでは自動詞の人称接辞がついており（ekesne は副詞であろうから目的語を抱合しているわけではなさそうだ)、沙流地方にも貝澤とぅるしのによる oraun kamuy sapa a=se wa san=an pe ne kusu po ene una unke=an wa marattokor=an kasi un「熊の頭を背負って山を下ってくるので、いっそう人を招待して酒宴を催したうえ」として、自動詞で用いられている例がある（【白老アーカイブ】「 005 平取町音声資料 005 貝澤とぅるしの（19 9)」172 行目)。なお、【久保寺辞典稿】p. 5 は una unke を ia unke と同じだとしており、だとすると自動詞であると判断していることになるだろうか。【バチラー辞典】p.21 は ia unke（ ya un e）を他動詞だとしている。

[2 5] ノートの右側に「マダユカナイデトメル　トメル e am」との書き込みがある。

[2] uweneusar と an の間に「-」（ハイフン）が存在する。金成マツによる筆録においてハイフンは使われている箇所をほとんど見ないが、後から書き加えられたと確実に判断できる痕跡も存在しない。

[2 7] 参考――「ちょうど半分とは限らない。全部でもないが全体の中のかなりの数の人やものを指す」【沙流辞典】p. 17。

5 05　　orkew kamuy utar a=e am wa kesto uenewsar=an ayne

オオカミのカムイたちを私は引きとめて、毎日よもやま話をしたあげくに

p.55

【原文翻刻】

etun kusu[28]　ye awa　kamui　utara s ino　nupetne wa　ene　awe okaii　sonno am e　okai utar　orowano　ikoramkor　rusui koroka　eyainukuri　oripak anwa　okai an awa ari　sonno koyairaike　koonkami　ponmenoko　is turano　nupetne　kotom iramu an　yairaike kor os ippa

【現代表記・日本語訳】

5501　kor　turesi a=etun kusu a=ye awa

彼らの妹を私は妻にもらおうと私は言ったところ、

5502　kamuy utar sino nupetne wa ene　aweokay　i

カムイたちは本当に喜んでこのように言う――

550　sonno an pe aokay utar orowano a=ikoramkor rusuy korka

「本当はところ私たちからそのことを相談したかったのですが、

550　a=eyaynukuri oripak=an wa okay=an awa

私たちがそのことに気兼ねをし、遠慮をしていたところを」

5505　ari sonno i=koyayrayke i=koonkami.

と本当に私に感謝し、オンカミ（拝礼）をする。

550　pon menoko　is turano nupetne kotom iramu=an.

少女は泣きながら喜んでいるように私は思う。

5507　yairayke kor　osippa

彼らが感謝しながら帰り

p.5

【原文翻刻】

tutko rereko　s iranko　orkeukamui　kottures i　nankot　ake[29]　eera　itke　montumkonna s umnatara　uturuta　e an uturuta　somoi e anno　otke an ranke　s ine an tota　nea pon menoko

---

[28] ノートの右側に「カリル（ヨメニモラフ)」との書き込みがある。

[29] ノートの右側に「自分が　シタ　カホヘ　ブラサガッタヤフニ（？）思フ」との書き込みがある。

kamui s irine nwa orokani ketus i sewa arki s irki iki s isosamta[20] s ituisamne[21] kikkik kane

【現代表記・日本語訳】

5 01 tutko rerko siran ko orkew kamuy kor turesi

二日三日するとオオカミのカムイの妹が

5 02 a=nankot ake eera itke a=montumkonna-sumnatara.

私の顔の前にちらついて、私の手力もしびれてしまう。

5 0 uturu ta ipe=an uturu ta somo ipe=an no otke=an ranke

時々食事をし、時々は食事もせずに横になっていることを私は続けて

5 0 sine an to ta nea pon menoko kamuy siri ne an wa

ある日のこと、その少女がカムイのような容貌をして

5 05 poro kani ketusi se wa arki

大きな金の背負い袋を背負って来る。

5 0 sirki iki siso sam ta situysam ne a=kikkik kane a= otuyekar

そうすると私は右座の自分の傍を叩きながら［ここへおいでと］私は呼ぶ。

p.57

【原文翻刻】

otuyekar s inukane reyekane ori ak tura rki as ikoruye eneene s ukup tuikata otuima s irwa[22] os ikotei yekane[2] utas pa eneene yainu an i aye kane eyaimakna[2] orari neitapak no inu inau inu sake enomi an eyaikamui[25] nerekane tuporepo ukosapte rammakane katkoro kane okai an

【現代表記・日本語訳】

5701 sinu kane reye kane oripak tura arki.

彼女はずって這って、遠慮とともに来る。

---

[20] ノートの右側に「主人の　」との書き込みがある。

[21] ノートの右側に「ソコノソバ ココヘオイデト　叩キナガラ」との書き込みがある。

[22] otuima の u と i の上あたりに「ツイマ」との書き込みがある。m の前を ii と書いた後で修正したような形跡があり、紛らわしくないようにカタカナを補ったか。ノートの右側に「遠イ所カラ」との書き込みがある。

[2] ノートの右側に「ホシタ」との書き込みがある。

[2] ノートの右側に「ソロッテ」との書き込みがある。

[25] ノートの右側に「エンブリデナク高カムイニ　ナッテクラス 自分デモ　ホントニカムイニナッタ　a-yai katkemat nere kane トイフ ㄱモアリ」との書き込みがある。

5702　a=sikoruye ene ene sukup tuyka ta
私は彼女を撫でさすり、かくかくしかじかこれまでの間
570　otuymasir wa a=osikote　i a=ye kane
遠くから思いを寄せていたことを言い、
570　utaspa ene ene yaynu=an　i a=ye kane a=eyaymakna-　orari[2]　.
お互いにかくかくしかじか思っていたことを言って、私たちは夫婦として連れ添う。
5705　ney ta pakno aynu inaw aynu sake i=enomi=an
いつまでも人間のイナウや人間の酒で私たちは祈られて
570　a=eyaykamuynere kane
私はそれでカムイとしての格を高めて
5707　tu po re po a=ukosapte ramma kane katkor kane okay=an.
二人の子ども、三人の子どもを私たちはもうけて、いつもいつもそのように暮らしている。

文献略号

【鹿の妻】：藤田護（202 ）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「鹿を妻とした貧乏人（yuk mat ne kor wen aynu）」『ユーラシア言語文化論集』第 25 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座、pp.251-297。
【カワウソ私に化ける 2】：藤田護（2022）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「カワウソが私に化けるウェペケレ（esaman i=sinere uepeker）」（後半）」『ユーラシア言語文化論集』第 2　号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座、pp. 77- 1 。
【カワウソ私に化ける 1】：藤田護（2021 ）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「カワウソが私に化けるウェペケレ（esaman i=sinere uepeker）」（前半）」『ユーラシア言語文化論集』第 2　号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座、pp.1　-181。
【金の煙草入れ】：藤田護（2021a）「金成マツ筆録ノートのアイヌ語口承文学テクストの原文対訳及び解釈――金田一京助宛ノート散文説話「金の煙草入れ（konkani tampakop）」」中川裕編『アイヌ語・アイヌ文化研究の課題』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、第　58 集、pp.15- 2。

---

[2]　【ユーカラ集 1】p.　1 では金田一京助は aeyaimakna-　orarire を「妻になる」と解釈しており、【ユーカラ集　】p.　2 には ueyaimakna　orari kunip　ane yakka（ueyaymakna-　orari kuni p　a=ne yakka）「相結婚　すべきもので　我らはあっても」という言い方もあるが、ここでは a=eyaymakna-　orarire で「私たちが夫婦として連れ添う」という意味になっているようだ。

【六人の山子】：藤田護（2018）「金成マツ筆録ノートの口承文学テクストの原文対訳及び解釈――散文説話「六人の山子（iwan yamanko）」」中川裕編『アイヌ語の文献学的研究（３）』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書、第 25 集、pp.25- 5。
【煙管が話す】：金成アシリロ語り、金成マツ筆録、蓮池悦子訳注（200 ）「煙管が話す」『アイヌのくらしと言葉 8』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 1 、北海道教育委員会、pp.87-170。
【ユーカラ集】：金成マツ筆録、金田一京助訳注（1959-1975）『ユーカラ集　～　』（全 9 巻）三省堂。
【ユーカラシリーズ】：金成マツ筆録、萱野茂・蓮池悦子・萱野志朗・切替英雄・高橋靖以訳注（1978-）『ユーカラシリーズ』各巻、北海道教育委員会。
【虎杖丸別伝】：金成マツ口述・金田一京助（199　19 7 ）「虎杖丸別伝」『金田一京助全集第十巻』三省堂、p.95-　2
【民譚集】：知里真志保編訳『アイヌ民譚集――付、えぞおばけ列伝』岩波書店（岩波文庫）。
【神謡集】：知里幸恵（202　1978 ）『アイヌ神謡集（補訂新版）』岩波書店（岩波文庫）。
【知里幸恵神謡】：知里幸恵（北道邦彦編・訳）（2005）『知里幸恵の神謡――ケソラプの神・丹頂鶴の神』北海道出版企画センター。
【知里幸恵ウウェペケレ】：知里幸恵（北道邦彦編注・補訳）（200 ）『知里幸恵のウウェペケレ（昔話）』北海道出版企画センター。
【ノート版神謡集】知里幸恵（北道邦彦編）（2000）『ノート版アイヌ神謡集（改訂版）』弘南堂書店。
【知里真志保フィールドノート　】：北海道教育委員会編（2005）『知里真志保フィールドノート 5 』北海道教育委員会。
【久保寺辞典稿】：久保寺逸彦（2020 1992 ）『アイヌ語・日本語辞典稿』（久保寺逸彦著作集④）草風館。
【人間篇】：知里真志保（199　195　）『知里真志保著作集別巻 2――分類アイヌ語辞典人間編』平凡社。
【バチラー辞典】：ジョン・バチラー（19 8）『アイヌ・英・和辞典』第 4 版、岩波書店。
【方言辞典】：服部四郎編（19　）『アイヌ語方言辞典』岩波書店。
【千歳辞典】：中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』草風館。
【沙流辞典】：田村すず子（199 ）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。
【萱野辞典】：萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』三省堂。
【奥田語彙】：奥田統己編（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌学院大学。
【神話集成】：萱野茂（1998）『萱野茂のアイヌ神話集成　～　』（全 10 巻）ビクターエンタテインメ

ント。

【音声資料】：田村すず子（198 -1999）『アイヌ語音声資料 1〜12』（全 12 巻）、早稲田大学語学教育研究所。

【白老アーカイブ】：国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ　U　ttps　ainu　o.nam.　o. p

【　研アーカイブ】：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「　研アイヌ語資料公開プロジェクト」　U　ttp　ainu　o.mon　. p

参考文献

萱野茂（2005）『（新訂復刻）ウウェペケレ集大成』日本伝統文化振興財団。

萱野茂（1977）『炎の馬――アイヌ民話集』すずさわ書店。

（ふじた　まもる・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部）

ynu ra e t in t e ritten ote ooks y atsu rose a e uepeker ite ease armine upas ironnup ritten or yosuke

U amoru

is arti e orms part o a series o e ort y t e aut or to make a essi e t e ora te ts written own in ynu an ua e y annari atsu in t e note ooks t at were passe on to in ai i yosuke an iri as i o. ere we pu is t e prose ta e upas ironnup w ite wease or earmine w ere t e main prota onist is t is sma anima known in apanese as oko o or e o ita i w o e omes aware o t e amine in t e uman wor aroun im w ere ot *kamuy* eities an *aynu* umans i e an sets out to so e t e pro em. n t e intro u tory se tion we ay out t e p i o o i a etai s o t e te t an possi e interpretations o t e story o owe y an out ine o t e story in apanese.

ter some remarks on t e ynu ort o rap y emp oye ere we present t e main part o t is arti e w i is a pa e- y-pa e trans ription o t e ori ina written ynu te t o owe y a mo i ie te t wit ontemporary ynu ort o rap y an its trans ation to apanese.